ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第80号

女谷横穴群(B支群)第2次調査 ---------- 岩松　保 -- 1
平成12年度京都府埋蔵文化財の調査 ---------- 水谷　壽克 -- 9
江蘇省・安徽省の遺跡を訪ねて
　－平成12年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会中国研修報告－ -------- 村田　和弘 -- 15
平成12年度発掘調査略報 ---------- 23
　19. 池上遺跡第8次・池上古里遺跡第2次
　20. 佐山遺跡第2次(B－1地区)
　21. 内里八丁遺跡
　22. 椋ノ木遺跡第4次
　23. 木津城山遺跡第4次
長岡京跡調査だより・77 ---------- 33
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧 ---------- 35
センターの動向 ---------- 36
受贈図書一覧 ---------- 38

2001年6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

女谷横穴群（B支群）第2次調査

岩松　保

1．はじめに

女谷横穴群は、京都府八幡市大字美濃山小字荒坂・御毛通に所在し、甘南備丘陵の一画に位置する。この周辺の八幡市と京田辺市との市境を中心とした地域には、荒坂横穴群や美濃山横穴群（6基）、狐谷横穴群（11基）、松井横穴群（9基）などが分布し、従来より、横穴が濃密に分布する地域として知られていた（第1図）。

日本道路公団・国土交通省は、京都－大阪間の慢性的な渋滞緩和のため、第二京阪道路および京都南道路の建設を計画した。京都府と大阪府との府境では、甘南備丘陵を横断するコースをとり、道路予定地に近接して、女谷横穴群と荒坂横穴群が分布している。そのため、平成11年度と12年度の2か年にわたって試掘調査を実施し、女谷横穴群および荒坂横穴群の拡がりを確認したところ、丘陵先端付近の道路予定地内で49か所の横穴状の土色の違いを検出した。平成12年度には、女谷横穴B支群に当たる21か所を調査し、その結果、15基が横穴であることが判明した。

今回の調査は、上述のように、第二京阪道路および京都南道路の建設に伴うもので、日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した。現地調査は、平成12年8月2日～平成13年2月27日までを要し、横穴状遺構21か所の確認調査をはじめとして、調査面積は、試掘調査分を含めて、約7,400m²である。

2．調査の概要

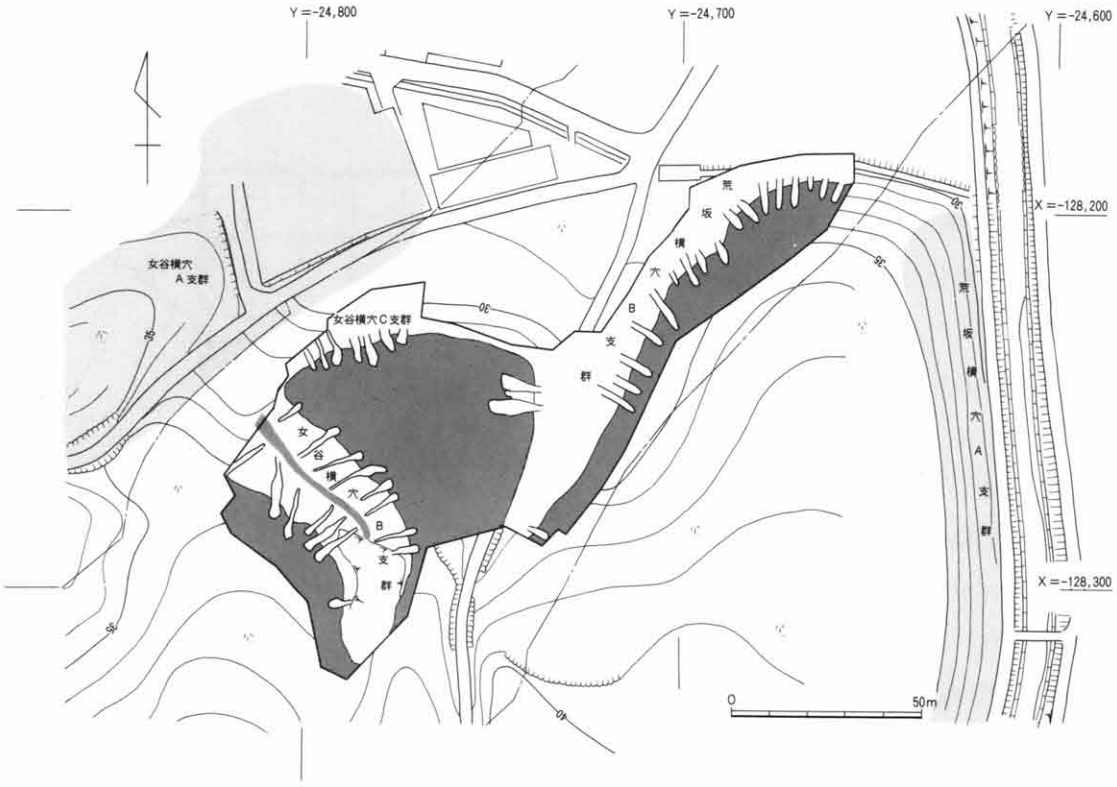
(1)横穴の分布　発掘調査に先立つ試掘調査で、平野に面した北側部分の丘陵裾付近で横穴群を検出した。開発対象地内には二つの谷が埋もれており、それぞれの谷間を中心に横穴が造られている（第2図）。西側の谷は、平野に面していない、奥まった位置にあり、谷の両斜面に横穴が対峙して造られている。また、この谷が平野に開けた位置にも横穴が造られていた。これらの横穴群は、大きく見ると、横穴群の立地する谷を一にしているという位置関係から、従来知られていた女谷横穴群（8基）と一連のものと判断された。とは

第1図　周辺横穴群分布図（1/25,000）
1.調査地 2.狐谷 3.美濃山 4.女谷 5.荒坂 6.松井

言っても、それぞれの群はやや離れて、小さな谷を異にしているので、同一の横穴群の中の下位レベルにおいて、群を異にしていると考えられる。そのため、従来の女谷横穴群を女谷横穴Ａ支群とし、今回新たに発見された、西側の谷内に分布する横穴群を女谷横穴Ｂ支群(試掘時21基；本調査後15基)、平野側のものをＣ支群(７基)と呼ぶことにした。

もう一つの谷は、荒坂横穴群が分布している丘陵の西側斜面に広がっている。この谷部で見つかった横穴群は、従来の荒坂横穴群(17基)と同じ丘陵の斜面に造られていることから、荒坂横穴群と一連のものと判断し、女谷横穴群の各支群と同じく、支群レベルにおいて異なった群を構成していると考えた。そのため、平野側に面した、これまでの荒坂横穴群を荒坂横穴Ａ支群、今回新たに確認した谷部のものを荒坂横穴Ｂ支群(21基)と呼ぶこととした。

このように、女谷横穴群と荒坂横穴群との間は従来空閑地と考えられていたが、その範囲で49基の横穴状の土色の違いを確認し、女谷横穴Ｂ支群の本調査を実施した現時点では、43基の横穴が稠密に分布していることが判明した。横穴群の呼称は、先述のように、周知の女谷横穴群・荒坂横穴群の名称を踏襲して命名したが、両横穴群は丘陵斜面を帯状に途切れることなく続いており、基本的には、同一の横穴群と捉えられるものである。今まで南山城地域で見つかっている横穴群は、10基前後の横穴で構成されているものであり、女谷横穴群・荒坂横穴群以外では総数で40基の横穴が知られているに過ぎない(『府遺跡地図』；昭和60年)。今回の試掘調査、および女谷横穴Ｂ支群の本調査の結果、女谷横穴群・荒坂横穴群全体では、横穴総数が全体で60基を超える墓域であることは間違いなく、南山城地域の横穴に関する従来の考えに変更をもたらすものである。



第２図　女谷横穴群・荒坂横穴群支群分布図

(2)横穴の構造(第3・4図)　横穴は、丘陵斜面を掘り込んで造られており、遺骸を納めるための玄室と墓道からなっている(以下、各横穴の玄室に至るための通路を「墓道」と表記し、横穴と横穴を繋ぐ通路を「通路」と表記し、区別したい)。墓道は丘陵斜面を切り通して造ったもので、天井は無く、玄室部分のみに天井が設けられている。

玄室の平面形態は、奥壁部が玄門部よりもやや広く逆台形を呈している。玄室と玄門部の天井までの高さは、天井がすべて崩落しているのでよく分からないが、玄室を掘り込んだ壁面に残る湾曲から、それぞれ約1.5mと1m強程度に復原できる。各横穴の各部の長さを一覧表にまとめておく。

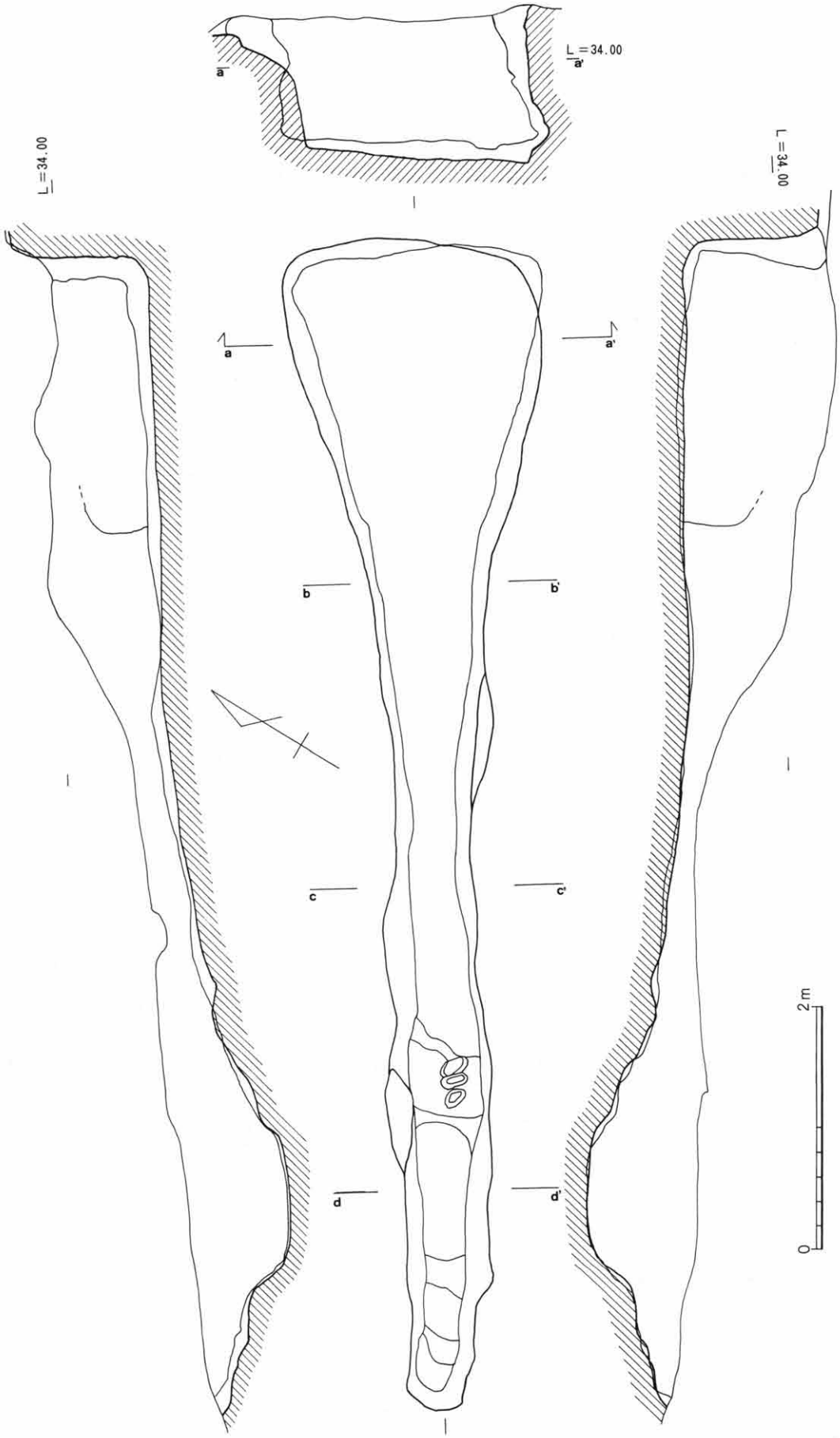
墓道は断面箱形の通路で、玄室の入り口から谷部の通路状遺構に向けて、ほぼ直線的に掘削されている。墓道の端はすべて谷内通路の直前で止まり、通路に合流して掘削されているものはなかった。この墓道の端近くは、土坑状に深く掘削され、黄色の砂で埋め戻されている。この土坑の機能についてはよくわからないが、墓道上に降った雨や周囲から墓道内に流れ込んだ雨水を処理のするためのものと想定される。もしそうならば、墓道内の雨水は、谷内の通路に直接排水されるのではなく、この土坑に一旦溜め、あふれ出た分が通路側に排水されたと考えられる。

玄室内には、通常で2～3回の埋葬面が見られるが、副葬品の配置などから、一埋葬面で3人程度の埋葬が最大であり、1つの横穴には、多くて5～7名程度が埋葬されたと想定される。ただし、女谷横穴B支群の横穴では、追葬を重ねる毎に副葬遺物が少なくなる傾向にあり、全く遺物が残っていない場合には埋葬面を認定するのは困難である。そのため、埋葬された人数は上記

女谷横穴B支群横穴一覧表

横穴番号	全長(m)	玄室長(m)	玄室幅(m)		備　考
			奥壁部	玄門部	
1号	(8.8)	——	——	——	墓道のみ検出。玄室部は調査地外。
2号	14.0	3.2	2.15	1.1	玄室奥壁付近で、径40cm程度のピットを2基検出。
3号	12.9	3.45	1.4	0.6	
4号	11.0	1.75	1.55	1.2	墓道先端部はゆるやかに曲がる。
5号	(10.25)	3.7	1.9	0.8	墓道の一部および先端部は削平により消失。
6号	12.3	(4.0)	2.1	1.0	玄門部～墓道端は削平により消失。奥壁部に玄室を拡張か？各部長は「拡幅」分を含まない。
7号	(5.7)	4.5	1.4	0.9	墓道先端部は削平により消失。
8号	(7.4)	2.7	2.1	1.15	墓道先端部は削平により消失。
9号	10.8	3.1	2.1	1.1	
10号	9.6	2.2	1.95	0.95	
11号	9.5	3.4	2.3	1.1	
12号	13.2	3.8	2.7	1.5	玄門から見て奥壁右側中段に小室を有する。
13号	13.0	4.0	2.8	0.6	
14号	11.8	3.6	2.1	1.25	
15号	(8.3)	3.1	1.9	0.7	墓道先端部は削平により消失。

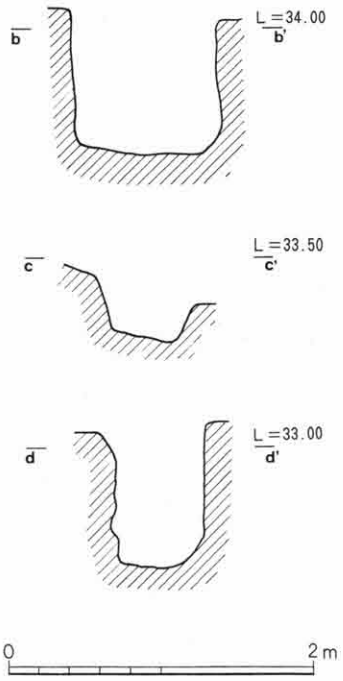
(　)は現存長



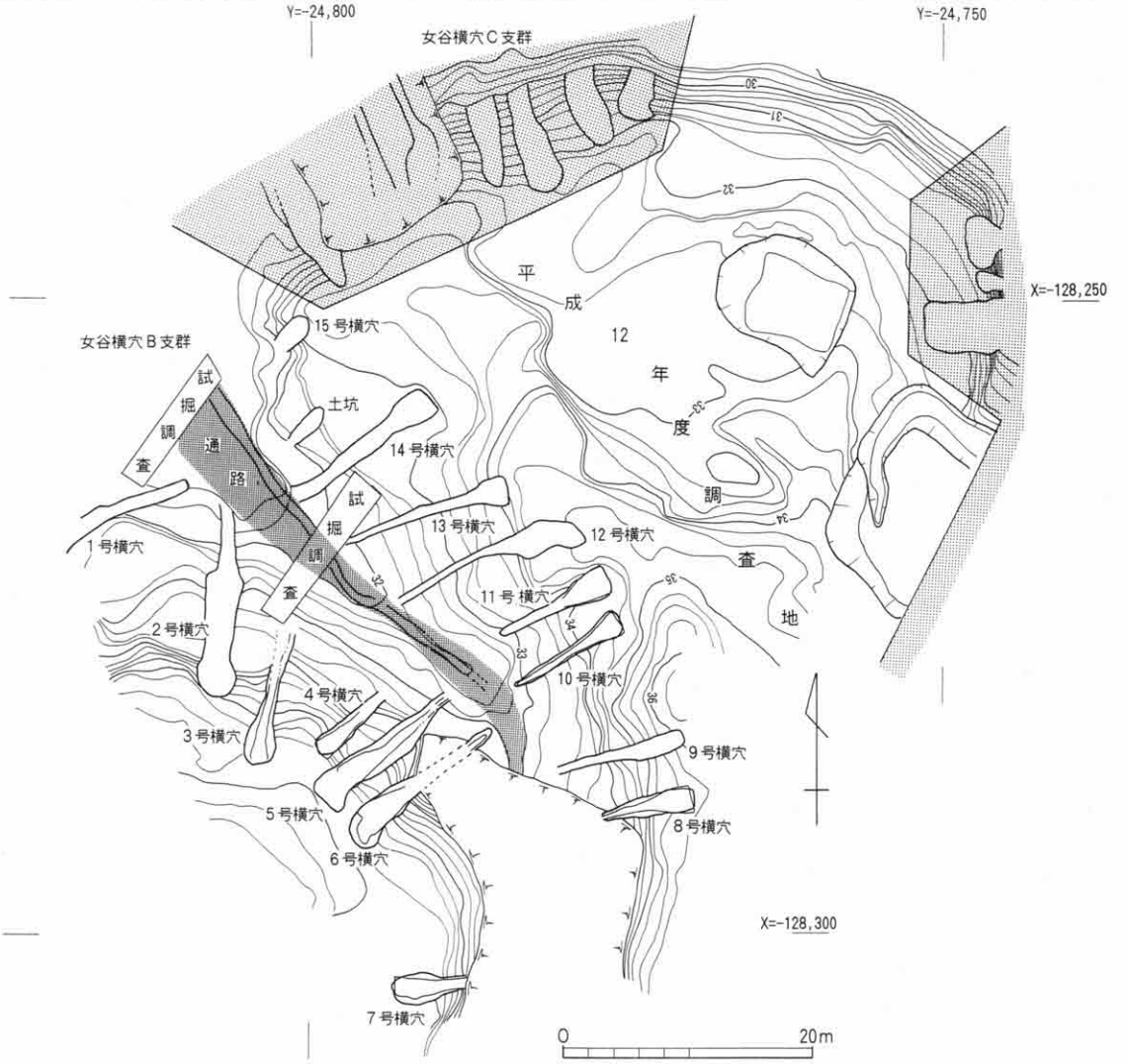
第３図　10号横穴実測図(1)

の数字よりも増える可能性がある。

横穴は、玄室に遺体を安置する時以外は玄門部で閉塞されていたと考えられる。女谷横穴群では、玄門部で閉塞石や特別な施設を全く検出できなかった。北西0.7kmにある狐谷横穴群の調査では、玄門部の床面に、主軸に直交する方向で、幅約40cmの溝が掘られているのが確認され、板戸をはめ込んで閉塞した痕跡と推定している。女谷横穴群の場合でも、板戸状のものを玄門部に立てて閉塞していたと推測されるが、今回の調査では土層観察によってもそれと確認できなかった。しかし、横穴の最終段階の閉塞の様子については、土層の観察により、ある程度分かってきた。横穴への最後の埋葬が終了すると、横穴の入り口に板戸を立て、次に閉塞部分の墓道内に土を盛り、板戸を入り口に固定する。この時、玄室入り口部の天井近くの高さまで土を盛り上げることもあったようである。盛土は、閉塞部だけでなく、墓道全体にわたって数10cmの厚さで盛り上げて



第4図　10号横穴実測図(2)



第5図　女谷横穴B支群調査地平面図(網部は平成13年度調査)

いる。その後、閉塞部から墓道の端に向けて、墓道の中央に溝を掘り、そこに石礫を埋めて暗渠溝を構築している。墓道上の排水に供するためのものであろう。13号横穴では、この排水溝中に下半部を打ち欠いた甕を倒立させて据えていた。こういった閉塞方法を採用し、排水溝を構築した理由は、雨水が横穴内に流れ込むのを防ぐためであったと考えられる。

(3)墓域内の通路状遺構(第５図)　今回調査した女谷横穴Ｂ支群では、谷底を縫って谷の奥に至る通路状の遺構を確認した。通路は、平安時代(10世紀中～後半)と古墳時代末頃(６世紀末～７世紀前半)の２時期に分かれる。

古墳時代末頃の通路は、谷底部分が石礫で固く締まって、路面が形成されている。谷奥では、おそらく自然の地形であろう、狭い「U」字形の谷底に石礫が固く締って堆積しているのに対して、谷の入り口に近い幅の広い平坦部(約５ｍ)が路面と判断されるものである。この平坦面は全域が砂礫混じり土で固く締っており、踏み固められたものと考えられる。また、幅50cm、深さ20cm程度の溝が約40ｍにわたって検出された。この溝は、谷奥部の狭い谷底部分に繋がっているが、この溝内および谷奥部の谷底部分には、ともに砂礫が入っており、路面と同じく、固く締まっていた。そのため、少なくとも人為的に掘削された溝については、意図的に埋め戻されて暗渠排水溝として機能していたものと思われる。この溝には、数回の造り替えが認められる。

この通路は調査地外に延びていくので、女谷横穴群の各支群を束ねて、近接する荒坂横穴群にも通じていたと考えられる。

平安時代の通路は、その時代に横穴を埋葬場所として再利用した際に通ったものと思われ、淡黄灰色粘質土が窪み状の通路内に堆積している。数基の横穴の墓道端に位置する通路内では、黒色土器の小片多数を検出している。

(4)小群の構成　女谷横穴Ｂ支群の横穴は、その平面の配置より、８ないし９の小群に分けられる(第５図)。横穴の主軸方向と近接具合より、１号横穴、２・３号横穴、４．５・６号横穴、７号横穴、８・９号横穴、10・11号横穴、12・13号横穴の７小群に分けられよう。14号横穴と15号横穴は、主軸方向が一致しているが、その間に空閑地があってやや離れており、同一の小群と認定してよいかどうか、判断しがたいところである。そのため、女谷横穴Ｂ支群全体としては、８ないし９の小群で構成されていると言えよう。

このそれぞれの小群は、例えば、４・５・６号横穴の出土土器を見ると、４号横穴→５号横穴→６号横穴という順に新しくなっており、それぞれの土器に隔絶は認められない(第６図；出土遺物の項参照)。また、それぞれの横穴は追葬を繰り返しており、家族墓としての様相を呈している。それぞれの横穴は家族を単位とした墓と捉え、さらに、時間的に連続して造られていること、異にする小群とはそれぞれ一定の距離を置いていることなどを考え合わせると、これらの小群は、ある家族が順々に横穴を作り、埋葬場所を替えていった、その集積であると言え、ある家族の墓が時間的に記録されたものが小群であると判断される。そのため、女谷横穴Ｂ支群の墓域は、８ないし９家族が、２ないし３回にわたって横穴を造り替えて墓地として利用していたと言えよう。

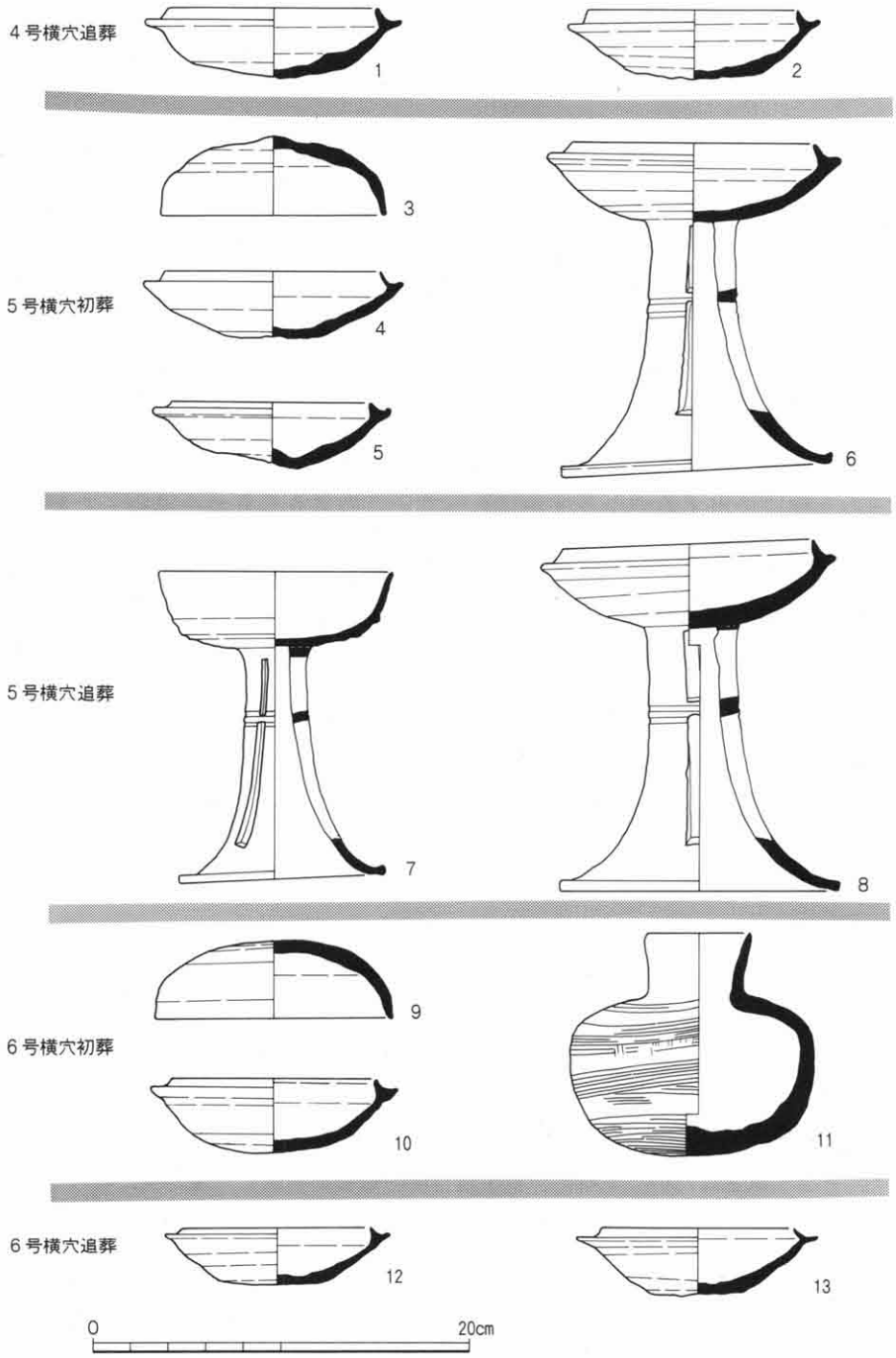
(5)横穴構築以前の土地利用　今回の調査により、横穴を構築する直前の包含層中より、6世紀中頃の土器片とともに埴輪片・鉄剣が出土した。こういった遺物の出土を見たことから、女谷横穴B支群が造られる以前には埴輪を樹立した古墳がこの近辺にあり、横穴用の墓地を造成する際にそれを破壊した可能性が指摘できる。

3．出土遺物(第6図)

出土した遺物には、須恵器・土師器・埴輪・鉄器・金環(耳環)などがある。

このうち、4・5・6号横穴から出土した須恵器は、古墳時代後期後半の6世紀末～7世紀前半代のもので、4号横穴→5号横穴→6号横穴という順に新しくなっている。土器の型式からみて新旧の流れには断絶がなく、横穴の構築と埋葬・新たな横穴の構築が時間的に途切れることなく、順次行われたものと考えられる。

このほか、横穴の内部からは平安時代に再利用されたことが知られる瓦器・黒色土器なども骨片と共に出土している。



第6図　出土遺物実測図

4．まとめ

今回の横穴群の調査により、南山城地域の横穴に関して新

たな知見が得られた。

まず、横穴の分布に関して、女谷横穴群と荒坂横穴群とが切れ目無く続いていることが判明し、60基を越える横穴が、稠密に分布していることが分かった。そのため、この周辺の丘陵裾は、大きな集団墓地であったと考えられるが、今までのところ、近隣ではこのような大規模な墓地を営むような大集落が見つかっていない。そのため現時点では、複数の集落がこの一帯を墓地として利用していたと推定しておきたい。

また、今回調査した横穴は、墓道や通路の残りが良く、その構造がよく分かるようになった。墓道には、排水溝や集水のための土坑が掘られ、雨水の処理に気を配ったものと推測される。玄室の閉塞方法についても、ある程度分かるようになってきた。

通路を介して、横穴の小群構成もよく分かった。横穴はそれぞれが無秩序に勝手に造られるのではなく、小群毎に横穴の主軸を揃えて整然と造られている点は、あらかじめ、小群を単位として、ある一定の空間を“占有”していることを想定せしめる。そのためには、この地を墓域として選定した当初から、広範囲に墓地の範囲が決められている必要があり、通路が存在している点や古墳を壊して墓地を造成している可能性などは、その必要性が実現していたということを傍証するであろう。

女谷横穴Ｂ支群は、平野に面していない谷の両斜面に造られており、こういった横穴群の構築のあり方は、これまでの南山城地域では知られていなかったものである。これが、平野に面した他の支群に後出するのかどうかによって、このような立地を選択した集団の動機に関する評価は変わるであろう。また、それぞれの支群を構成する横穴の構造や副葬遺物の異同などについても、そういった支群を構築した集団間の関係を推測するために、不可欠な情報である。

女谷横穴群と荒坂横穴群の調査は、平成13年度にも引き続いて実施しており、日々、新たな知見が得られている。その成果をふまえて、上述の問題点や女谷横穴群・荒坂横穴群の群構成、その築造順位、横穴の階層性の有無、支群間の関係などについて細かな検討を加えていきたい。そして、南山城地域における横穴群への被葬者像に迫り、女谷横穴群・荒坂横穴群の位置づけについて検討を加えたい。

注　今回報告した挿図には、調査中に使用した略測図を一部、用いて作成している。そのため、正式の報告においては、今回の挿図面の一部に変更を加え、若干の異動が生じるものである。また、各横穴群の支群構成・その基数・各部長をはじめとする事実関係やその理解については、平成13年３月末日現在のものである。そのため、今後の調査や整理作業の進展により、その理解が変わる可能性があることを了承されたい。実際に、平成13年度の調査を再開した現時点にあっては、横穴の基数と分布について、昨年度の内容に変更を加える必要が生じているが、混乱を防ぐために、平成12年度以前に確認された事実を基に記している。

（いわまつ・たもつ＝調査第２課調査第３係主任調査員）

平成12年度京都府埋蔵文化財の調査

水谷　壽克

丹後半島では、卑弥呼の時代と考えられる頭飾り(玉鬘)が非常に良好な状況で検出され、平成10年に岩滝町大風呂南墳丘墓で出土したガラス製釧に匹敵する貴重な資料として新聞紙上を賑わせた。出土したのは峰山町赤坂今井墳丘墓の第４主体部で、中心に位置する国内最大級の主体部に次ぐ規模の埋葬施設からである。

新聞紙上にはほぼ毎日のように各地の埋蔵文化財ニュースが掲載されている。京都府内でも各市町教育委員会や調査団体により多くの調査が実施され、多大な調査成果が得られている。

以下、平成12年度に京都府内で実施された発掘調査成果を当調査研究センターが実施したものを中心に概観する。

１.縄文時代

京北町東山遺跡では、包含層内から多量のチャート製石器や、石刃技法により作られたとみられる剥片が出土し、また縄文時代の土器片とともに、石匙や石鏃も出土している。

大宮町沖田遺跡では沖積地の谷部に流入した遺物包含層内から、縄文時代早～中期の土器資料が出土している。

ほかには、八木町池上遺跡で縄文時代の石鏃１点が出土し、大山崎町下植野南遺跡でも縄文時代後期から晩期の土器片が出土している。

２.弥生時代

池上遺跡は、筏森山東麓裾部の微高地上に広がる弥生時代中期から古墳時代後期の集落遺跡である。第８次調査地は、遺跡の南東隅にあたり、中期の円形竪穴式住居跡を２基検出した。住居内から土器とともに、管玉の未製品が出土し、玉生産を行っていたことが明らかになった。また、幅約２ｍ、深さ約１ｍの断面が「Ｖ」字形を呈する溝内から中期の土器がまとまって出土し、居住区域を限る溝と考えられる。

園部町善願寺遺跡では、中期の竪穴式住居跡１基を検出した。住居内からは弥生土器のほか、サヌカイト製の石器や剥片が出土し、石器生産が行われていたものと判断される。

下植野南遺跡では、中期前葉の限られた時期(畿内第Ⅱ様式末から第Ⅲ様式初頭)に100基に及ぶ方形周溝墓群が築かれていることが判明した。大規模な墓域にともなう集落域の調査が期待される。

木津町大畠遺跡では、弥生時代中期の土器棺２基と一辺約６ｍの方形周溝墓１基を検出した。

平成12年度発掘調査一覧(当センター調査分のみ)

番号	遺　跡　名	種別	所在地	担当者	調査期間	概　　要
1	赤坂今井墳丘墓	墳墓	峰山町	石崎善久 岡林峰夫	7～10月	弥生時代後期の大型墳丘墓。第１主体部は最大規模の墓壙。第４主体部からは頭飾り。
2	沖田遺跡	集落跡	大宮町	石尾政信	5～7月	古墳時代の竪穴式住居跡、中世の柱穴・溝。縄文土器。
3	南稲葉遺跡	集落跡	綾部市	黒坪一樹	5～8月	奈良～平安時代の竪穴式住居跡・柱穴。
4	シリガイ古墳群・エノク経塚	古墳・経塚	宮津市	岩松　保	6～9月	古墳状の隆起。鎌倉時代の経塚４基確認。
5	東禅寺古墳群	古墳	宮津市	岩松　保	7～8月	古墳２基確認。
6	桑原口遺跡	集落跡	宮津市	引原茂治	11～12月	弥生時代後期の溝・土坑。
7	橋木林遺跡	城跡	舞鶴市	中島史子	5～7月	平安時代末～鎌倉時代初期の経塚。山城に伴う溝。
8	今林遺跡	集落跡	園部町	引原茂治 福島孝行	5～9月	弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴式住居跡。
9	今林古墳群	古墳	園部町	引原茂治 福島孝行	4～9月	古墳３基。６号墳から甲、鏡。 ８号墳は弥生時代の墳丘墓（８号墓）と判明。鏡。
10	善願寺遺跡	集落跡	園部町	石崎善久	5～6月	弥生時代の竪穴式住居跡。中世の柱穴。
11	池上遺跡		八木町	村田和弘	6～11月	平安時代の掘立柱建物跡。
12	池上遺跡・池上古里遺跡	集落跡	八木町	田代　弘 岡崎研一 野島　永	11～2月	弥生～古墳時代の竪穴式住居跡。玉未製品。
13	太田遺跡	集落跡	亀岡市	戸原和人 増田孝彦 小池　寛	5～2月	古墳時代～中世の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡。
14	東山遺跡	集落跡	京北町	中川和哉	6～11月	古墳時代後期の竪穴式住居跡。縄文時代の石器。
15	半木町遺跡	集落跡	京都市	田代　弘	7～10月	平安時代の掘立柱建物跡。
16	下植野南遺跡	集落跡	大山崎町	松井忠春 石井清司 藤井　整 中島史子	4～3月	弥生時代中期の方形周溝墓。 古墳時代中・後期の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡。 中・近世の古道。
17	百々遺跡	集落跡	大山崎町	松井忠春	8～12月	平安時代の土坑・掘立柱建物跡。
18	佐山遺跡	集落跡	久御山町	竹原一彦 森島康雄 中村周平 野々口陽子	5～3月	弥生時代後期～古墳時代前・中期の竪穴式住居跡。 平安時代～中世の溝群。 中世の大規模な濠跡。
19	市田斉当坊遺跡	集落跡	久御山町	竹原一彦 野々口陽子	1～3月	中世の溝群、坪境溝。 次年度継続調査。
20	木津川河床遺跡12次	集落跡	八幡市	黒坪一樹	9～1月	中世の溝。古墳時代前期の土師器。
21	木津川河床遺跡13次	集落跡	八幡市	石尾政信	10～12月	中世の溝、滑石製品。
22	上津屋遺跡	集落跡	八幡市	福島孝行	11～2月	中世の溝・土坑。中・近世の堂に伴う溝。
23	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	引原茂治 石尾政信 村田和弘	12～2月	中世溝・柱穴。次年度下層調査。
24	女谷横穴群	横穴	八幡市	岩松　保 柴　暁彦 黒坪一樹 石崎善久	8～2月	横穴40基以上確認。内21基調査。墓道確認。須恵器・土師器・金環。
25	稲葉遺跡	集落跡	京田辺市	森島康雄	4～8月	弥生時代前期の土坑。

26	三山木遺跡	集落跡	京田辺市	岡崎研一	7～10月	平安時代の掘立柱建物跡。
27	椋ノ木遺跡	集落跡	精華町	藤井　整 中島史子	12～2月	縄文時代晩期の土坑。古墳時代の竪穴式住居跡。中世の溝・土坑。
28	森垣外遺跡	集落跡	精華町	小池　寛	6～8月	古墳時代中･後期の掘立柱建物跡。
29	大畠遺跡	集落跡	木津町	伊賀高弘	4～6月	弥生時代中期の土器棺。 古墳時代中･後期の竪穴式住居跡･溝･土坑。
30	木津城山遺跡	集落跡	木津町	戸原和人 伊賀高弘 筒井崇史	5～2月	弥生時代後期の竪穴式住居跡。
31	内田山遺跡	集落跡	木津町	筒井崇史	1～2月	遺物包含層。弥生土器・土師器・埴輪。

調査区の南方の台地上に展開する集落の墓域と考えられる。

長岡京市神足遺跡では弥生時代中期の土器資料とともに、全国的にも３例目となるいのしし形土製品が出土している。

木津町木津城山遺跡は、これまでの調査で弥生時代後期前半の大規模な高地性集落であることが判明している。昨年度に継続して丘陵斜面の調査を実施し、竪穴式住居跡や段状遺構を検出した。

峰山町赤坂今井墳丘墓は、昨年度、大規模な墳丘墓と判明したことから、遺跡の保存整備を目的として範囲および、中心に位置する第１主体部の墓壙確認調査が実施された。その結果、墳丘は南北37.5m、東西35m、高さ約3.5mを測る方形の主丘部に幅約５mのテラスがめぐる弥生時代末の最大級の墳丘墓であることが明らかになった。また、主丘部では第１主体部および第４主体部の墓壙が当初想定した規模をはるかに上回ることも判明した。第４主体部では棺内全面に赤色顔料が塗布され、頭部からガラス製・碧玉製の管玉・勾玉による頭飾りが良好な状態で出土した。また、第１主体部の墓壙規模は南北14m、東西10.5m、深さ2.5mを測り、弥生時代の墓壙としては全国で最大規模であることが判明した。第１主体部棺内の調査は次年度以降となり、その成果が期待される。

第１図　赤坂今井墳丘墓出土頭飾り推定復元図(壱岐一哉氏画)

園部町今林８号墓は、弥生時代末の墳丘墓であることが判明した。８号墓は、東西18m、南北15mを測る墳丘墓で、墳頂部に３基の埋葬施設を有する。中心となる第１主体部は主軸を東

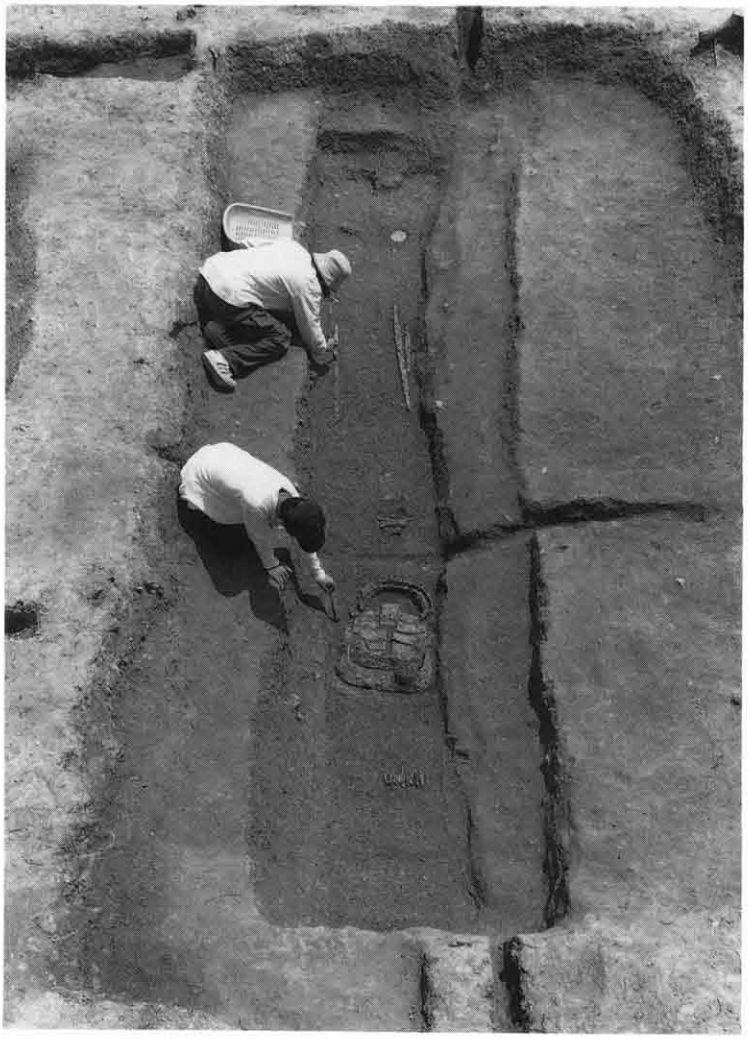
西にとる二段墓壙の木棺直葬墓で、墓壙内より仿製鏡１面・ガラス製管玉・鉄製品２点などが出土した。８号墓から出土した鏡は、弥生時代末(庄内期)に副葬されたと考えざる得ず、仿製鏡の初源を考える上で貴重な資料となった。また、園部町今林遺跡では、後期後半の竪穴式住居跡３基を検出した。そのうち１基は５角形を呈する多角形住居で、他地域との交流を知る貴重な成果を得た。

このほか、京都市北白川追分町遺跡で弥生時代前期の水田跡を、丹後半島では加悦町日吉ヶ丘遺跡で中期の貼り石墓や大宮町今市墳墓群では後期前半の墳墓の調査が実施された。

３.古墳時代

池上遺跡８次調査では、古墳時代後期の竪穴式住居跡11基と、土坑・溝・柱穴群を検出した。これまでの調査成果を合わせると、弥生時代の住居跡が15基、古墳時代の住居跡が87基検出されたこととなる。古墳時代を中心とした大規模な集落遺跡である。

今林６号墳は、東西22m、南北15mを測る長方形の方墳で、墳頂部に円筒埴輪をめぐらせている。埋葬施設は主軸を東西にとり箱形木棺１基が確認された。墓壙内から長方板革綴短甲１領・内行花文鏡１面・鉄製品・玉類・竪櫛など豊富な副葬品が納められていた。出土遺物から古墳時代中期前半の古墳と考えられる。園部町には、南丹波において前期古墳を代表する園部垣内古墳が存在する。今林６号墳はその豊富な副葬品や他の中期前半の古墳分布状況から、園部町北半部を支配領域とした被葬者が想定され、南丹波の中期古墳を考える上で貴重な成果を得た。



第２図　今林６号墳短甲出土状況

久御山町佐山遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の竪穴式住居跡を多数検出し、大規模な集落遺跡であることが判明した。中でも古墳時代前期の住居跡が大半を占め、頻繁に立て替えが行われている。また、これらの住居

跡から竈が検出され、山城地域における導入期の竈として注目される。

大畠遺跡では、竪穴式住居跡３基とその住居跡に重複して、６世紀の遺物を多量に含む溝や掘立柱建物跡を検出した。このことから、当地域では６世紀に竪穴式住居跡から掘立柱建物跡に移行することが明らかとなった。また、古墳時代後期の溝内より、日常雑器とともに手捏ねのミニチュア土器が出土し、儀礼的な祭祀が執り行われたことがわかった。

精華町森垣外遺跡は、平成８年度からの調査で大壁住居跡や陶質土器の出土、一辺46mの方形区画溝に囲まれた大型の掘立柱建物跡群や、他地域との交流を積極的に行ったとみられる出土遺物などから、古墳時代中期後半から後期前半にかけての拠点的な集落遺跡あると考えられる。今回検出した後期の掘立柱建物跡群は、規模が比較的大きく、総柱建物を含むことから、集落の中核をなす建物群と考えられる。

八幡市女谷横穴Ｂ支群では、平野に面さない狭小な谷の両斜面に、隣接して築かれた15基の横穴を検出した。墓道や通路の遺存状態が良く、排水溝や集水土坑も確認された。横穴群の各支群と隣接する荒坂横穴群とが切れ目なく続くことから府内では最大規模の横穴群であることが判明した。

宇治市観音山古墳では墳丘規模の確認調査が行われ、前期に築かれた直径50mを測る府南部では最大級の円墳であることが判明した。向日市五塚原古墳では、墳丘の測量調査、および、墳丘部の調査が実施され、葺石の遺存状況などが明らかとなった。また、亀岡市桝塚古墳は、中期の一辺約40mの方墳で、幅約10mの周溝を巡らせることが明らかとなった。

このほか、今林遺跡Ｂ地区では、古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡４基を検出している。下植野南遺跡でも、前期及び後期の竪穴式住居跡を検出している。

４.歴史時代

恭仁宮跡では東西に並ぶ内裏の東地区西辺・南辺の調査が行われ、その規模が東西約110m、南北約137mと判明し、東地区が西地区を上回ることから、内裏正殿の可能性が高くなった。

長岡京跡では、宮内第390・392次調査で北一条大路の南北両側溝と南側溝に並行する柵列を、朝堂院南方官衙推定地の第400次調査で梁間10尺、桁行13尺の南北礎石建物の礎石抜き取り跡が検出された。また、京域内では条坊復原の定点ともなる条坊側溝や建物跡が多数検出されている。左京域では第455次調査では東二坊大路西側溝および柵列を、第447次調査で一条条間北小路南側溝と一条二坊十町の町内溝を、第451次調査で東一坊大路東側溝を検出している。右京域では第673次調査で五条条間小路南側溝を、第675次調査で六条条間北小路北側溝がそれぞれ検出されている。

平安京跡右京三条一坊六町の調査では、平安時代前期の大規模な建物の柱列や州浜を検出し、建物規模や池の配置から一町四方を占める貴族の邸宅跡と考えられている。同じく、一町域の邸宅跡が確認された平安京跡右京三条二坊十六町の調査では、「斎宮」と墨書された土器が出土し、斎宮との関連が注目される。また、二条城内では冷泉院園池の「遣り水」遺構を検出している。

綾部市南稲葉遺跡では丘陵頂部の平坦面は後世の耕作により削平されているものの、谷のゆるやかな斜面地を利用して飛鳥から平安時代にかけての住居跡が検出された。多くの煮沸具や土馬などが出土し、祭祀遺構の可能性もある。

京都市左京区半木町遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡を検出した。このことから植物園北遺跡に隣接して遺跡が展開することが明らかとなった。

このほか、池上遺跡第７次調査では、平安時代の総柱建物跡や溝・土坑、遺跡北端を限る自然流路を確認し、八幡市美濃山廃寺跡では奈良時代の柱穴や白鳳から天平期の瓦が出土している。京都市北区上ノ庄田瓦窯跡では、窯跡２基と作業場などを検出し、淳和天皇の離宮である雲林亭にかかわる９世紀前半の官営瓦工房の生産工程を垣間みる貴重な成果を得た。

下植野南遺跡では、鳥羽離宮から山崎離宮・山崎津を結ぶ旧街道(久我畷)を検出し、少なくとも鎌倉時代には存在したこと、また、現府道として存続し続けたことが明らかとなった。

佐山遺跡では、久世郡条里にほぼ合致した道路や側溝、島畠や畑地を検出し、坪内の土地利用が明らかになった。

八幡市上津屋遺跡は木津川沿いの沖積地に広がる古代から中世にかけての遺物散布地として知られた遺跡である。府営住宅上津屋団地改築にともなう調査で、13世紀・14世紀の瓦器椀や羽釜が出土する溝・土坑などを確認した。鞴の羽口や椀形滓などが出土しており、鋳物師もしくは鍛冶の存在が窺われる。

大宮町沖田遺跡では、13～14世紀の区画溝周辺から、多量の木製品(人形・形代・草履の芯・杓子・独楽・唐傘の部材・下駄など)が出土し、丹後地域での生活様式を窺う貴重な資料である。また、内面に動物の絵が描かれた土師器皿も出土している。

野田川町地蔵山遺跡では室町時代初期の「塚墓」を、平安京跡左京域の調査では軒を連ねる五棟の建物跡や半地下式の倉庫を検出し、室町時代前期の町家が明らかとなった。

方広寺旧境内の調査では、大仏殿の建物基壇や階段跡とみられる石組みを検出し、東大寺の大仏殿をしのぐ大規模な建物であったことが判明した。

また、京都御苑内では、地表面から２ｍ下に江戸時代初期の公家屋敷跡の「庭池」が検出されている。

(みずたに・としかつ＝調査第２課課長補佐兼調査第１係長)

江蘇(こうそ)省・安徽(あんき)省の遺跡を訪ねて

－平成12年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会中国研修報告－

村田　和弘

1．はじめに

全国埋蔵文化財法人連絡協議会では、これまで８度にわたる中華人民共和国への海外研修を実施している。昨年度からは全国の法人が対象となった。今年度の研修には、全国埋蔵文化財法人連絡協議会に加盟している15団体から23名が参加した。

今回の研修では、江蘇省・安徽省に所在する遺跡や博物館を見学した(第１図)。研修期間は平成12年11月21日～平成12年11月28日までの８日間であった。当調査研究センターからは村田和弘が参加した。また、今回掲載している写真は、村田が撮影したものである。

研修行程表

月日(曜日)	地名	見学地・宿泊地
11月21日(火)	東京・大阪 ｜ ｜ 上海 ｜ 揚州	14：15東京(成田)発－16：35上海(浦東空港)着 13：40大阪(関空)発－14：55上海(虹橋空港)着 成田組が予定より２時間半遅れ、その後虹橋空港へ移動、 関空組と合流し結団式 専用バスにて宿泊地へ
11月22日(水)	揚州 ｜ 南京	揚州：広陵侯墓、　江甘泉山２号墓、隋煬帝陵、 天山漢墓博物館、揚州博物館 南京：淮海路工地発掘現場見学、大明寺
11月23日(木)	南京 ｜ 馬鞍山 ｜ 南京	馬鞍山：朱然墓 南京：南唐二陵、南京市博物館
11月24日(金)	南京 ｜ 徐州	南京：南京博物院、明孝陵
11月25日(土)	徐州	徐州：白集画像石漢墓、亀山漢墓、獅子山漢兵馬俑博物館 獅子山漢楚王墓
11月26日(日)	徐州 ｜ 南京	徐州：土山漢墓、徐州博物館
11月27日(月)	南京 ｜ 金壇 ｜ 上海	金壇：三星遺跡
11月28日(火)	上海 ｜ 大阪 東京	12：35上海(浦東空港)発－15：25大阪(関空)着 17：15大阪(関空)発－18：30東京(羽田)着

2．研修の概要

研修の見学地は、主に博物館と漢代の墳墓などであった。見学地・研修の行程・内容については、日程ごとに概要を報告する。

11月21日（第１日）　今回の研修参加者は、関西国際空港から出国する組と成田空港から出国する組に分かれて中国に向かった。

13：40（日本時間）に関西国際空港から出発した組は14：55（現地時間）に定刻通り上海虹橋空港に到着したが、成田空港から出発した組は飛行機の計器などのトラブルのため、およそ２時間半遅れて上海浦東空港に到着した。その結果、初日から計画がくるい、揚州に着いてから行う予定

第１図　研修見学地位置図（■が訪問地）

であった結団式(夕食)を上海で行うことになった。このため上海出発が遅れ、移動のバスが長江をわたる橋などで交通渋滞に巻き込まれてしまったこともあり、揚州のホテルに到着したのは午後10時過ぎであった。

11月22日(第２日)　揚州の北側に位置する甘泉山にある広陵侯墓を見学した。この墓の被葬者は不明であるが、「侯」という高級官僚または家族の墓とされている。

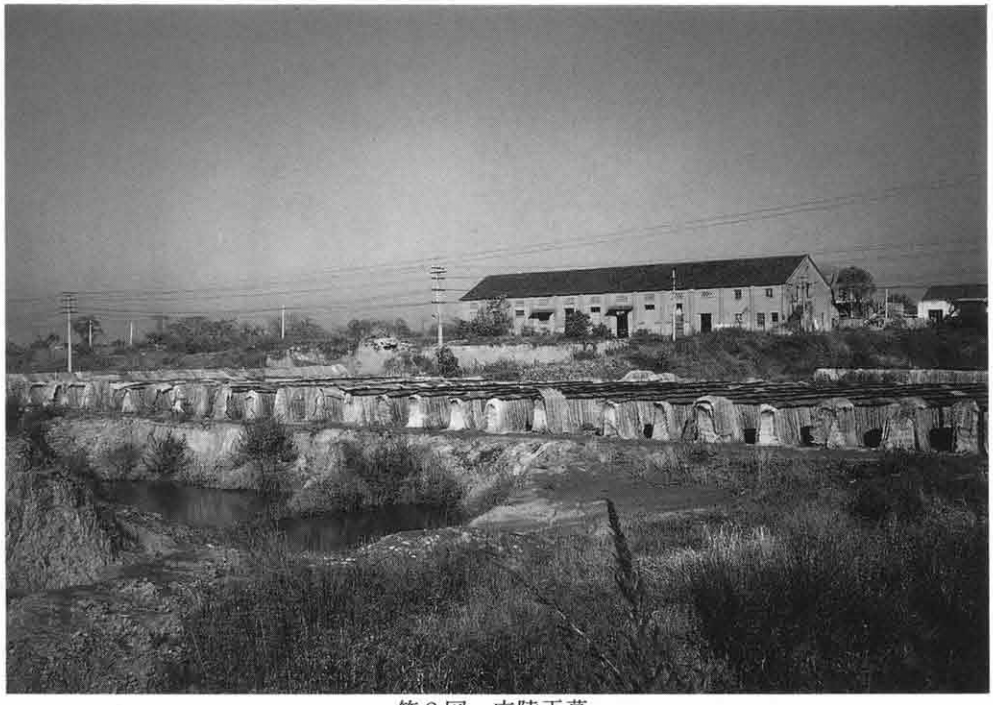
墳形は円墳で、その墳丘はレンガ用の粘土採りよっていたるところが削られている。これに隣接したところに甘泉山広陵王墓(甘泉２号漢墓)が所在している(第２図)。レンガ用の粘土採掘の際に発見された墓で、1980年に南京博物院が調査を実施した。墳丘はすでに削平されており、磚室墓(磚を積み上げた石室)の天井部は地表面から５ｍ下で確認された。なお、墳丘の盛土は版築であったらしい。

この墓の被葬者は劉荊夫妻であり、劉荊は後漢の皇帝であった光武帝劉秀の子である。劉荊は30代の頃に光武帝に対して謀反を起こし、その後自害した人物である。粘土採掘時の排土から、西暦58年に劉荊に贈られたという金印が発見されている。調査後の現在は、溜め池となってしまっている。

その後、隋煬帝陵を見学した。この煬帝陵は唐の時代に阮元がこの地に墓を築造し、629年に魂をまつる儀式をおこない指定した墓である。きれいに整備されているが、墓の範囲や整備されている池などのすべては当時のものではなく想像して造られたものである。

つづいて高郵神居山に所在する天山漢墓博物館を見学した。1979年に採石作業の際に４基の墓が発見された。１・２号墓は埋葬施設をもち、あとの２基は陪塚であった。１号墓は王劉の墓、２号墓は妃の墓であることが判明している。

王劉の墓である１号墓は、揚州に移築保存され博物館として公開されている。墳丘は５～６ｍ



第２図　広陵王墓

とされ、埋葬施設は「黄腸題凑(こうちょうだいそう)」という形態で、前漢の中期から晩期まで採用されていた墓制である。この墓制は王クラスに用いられおり、現在９基が確認されている。この墓制は、850余りの木材を組み合わせ宮殿を模している。棺が安置される棺室のまわりには、武器庫や台所、風呂などを模した部屋が10室設けられている。

出土品は1,000点近くにのぼり、展示施設には死者の装束である金鏤玉衣や木俑・陶器などの副葬品が展示されている。

その後、揚州博物館を見学した。この博物館は、天寧寺の跡地に建てられている。館内には、揚州内の遺跡から出土した代表的な文物や美術品などが展示されている。

博物館の中央には、1960年京杭大運河の改修の際に発見された長さ13.65m、幅0.75mの唐代のカヌーが展示されている。そのほかには、甘泉山広陵王墓から出土した金印のレプリカのほか銅鏤瑠璃衣、漢代の木版彩画、揚州八怪の書画などが展示されている。博物館を見学したのち、南京に移動した。

南京市内で昼食をとったのち、大明寺を見学した(第３図)。南北朝の宋代大明年間(457～464年)に建てられた寺で、現存しているのは清代同治年間(1862～1874年)に再建されたものである。また、唐代に高僧鑑真(688～763年)が住居とし講義を行った場所である。

鑑真は10年余りにわたって渡日を試み５度失敗し失明したが、746年に６度目にして日本に辿り着いた。その後、奈良に唐招提寺を建立し、中国の仏教、医学、語学、印刷技術などを伝えた日本にゆかりのある人物である。寺内には1963年に没後1200年を記念して、鑑真記念堂が建てられている。寺内を見学したのち、南京市内のホテルに向かった。

11月23日(第３日)　この日はまず、1984年に発見された安徽省馬鞍山市に所在する朱然墓博物館を見学した。朱然墓の被葬者は三国時代の呉の右軍師大司馬朱然(182～249年)であり、孫権に

第３図　大明寺

次ぐ実力者であった。この墓はつぎの晋の時代に盗掘されており、剣や金印などの多くの副葬品が盗まれていることも分かっている。敷地内には展示施設もあり、朱然墓から出土した遺物や周囲で調査された家族墓から出土した遺物が展示されている。埋葬施設である磚室墓は、もとの位置で覆屋を設け、一部破損した部分を補修して展示されている。

その後南京に戻り、南唐二陵を見学した。南唐とは五代十国時代(907～960年)に興された小国(923～936年)である。李昪(欽陵)は南唐の初代皇帝で、李璟(順陵)は2代目の皇帝である。埋葬施設は磚室墓で、前室・中室・後室があり、それぞれに側室が設けられている。奥の後室には棺座がある構造である。石室内の柱には、木造建築の柱を模した彫刻がなされている。

つづいて南京市博物館に移動した。博物館は、朝天宮の大成殿という清代の建物を利用している。朝天宮とは明・清代では、公的なしきたりを学ぶ場所であったされている。また、朝天宮には孔子がまつられている。見学した時期は、ちょうど『六朝・明代文物展』というテーマの特別展が開かれていた。

11月24日(第4日)　南京博物院の開館時間にあわせてホテルを出発した。南京博物院は南京市内の中心部にある国立の博物館である。博物院には、南京周辺から出土した一級の遺物や一級の芸術品が展示されている。

また、博物院内を見学する前に南京博物院の研究員である王根富氏の案内で、自らが調査され現在整理中の三星遺跡の出土遺物を見学させていただいた。金壇市三星村にある新石器時代の遺跡で、1993～1998年に調査が行われた。調査面積は約630㎡で、約1000基の土壙墓と多くの遺物が発見され、馬家浜文化期の玉類や土器・石器・骨器などが出土している。また、1600体におよぶ人骨が出土している。

その後、明孝陵を見学した(第4図)。明孝陵は1381年に造られた明太祖の墓である。墓は未調

第4図　明孝陵

査であり、墳丘は直径約325～400mの円墳と考えられる。1382年に正夫人である馬皇后が死去、皇帝は1412年に死去している。明孝陵を見学したのち、徐州に向けて移動した。

11月25日(第５日)

はじめに青山泉白集東漢画像石墓を見学した。この墓は後漢の晩期(西暦200年)に築かれた墓で、1965年に調査されている。埋葬施設は地表から1.5m掘り下げ、石を積んでいる。石室内部の壁面の26面には、彫刻(浮き彫り)が施されている。彫刻(画像)には、生前の生活の様子や想像上の動物などが描かれている。

また、地下の石室に入る前の地上面には儀式を行う祠堂があり、石室の入り口の両側には画像石といわれる石板が建てられている。その石板には東王皇と西王母や役人達が、宮殿で各人を迎える様子が描かれている。

つぎに亀山漢墓(亀山２号西漢崖洞墓)を見学した(第５図)。この墓の被葬者は第６代楚王の劉注(紀元前15年)で、岩盤を刳り抜いた崖洞墓である。調査は1981年と1992年に行われた。この墓は徐州では唯一被葬者が判明している墓である。墓には覆屋が建てられ、出土した遺物が見られる博物館になっている。

その後、天山に移動して獅子山兵馬俑博物館を見学した。博物館は獅子山村の墓域の近くにあり、兵馬俑の窯跡の遺物や窯の遺構を展示している。兵馬俑の窯跡は、1991年のほ場整備工事中に発見された。1994年に発掘調査され、５基の窯跡が確認されている。１号坑からは1000体の人物や馬などの陶俑が出土し、２号坑からは1300体の陶俑が出土した。博物館には１・２号兵馬俑坑(窯)が検出した状態で展示されている。

少し離れたところに獅子山漢楚王陵がある。この墓は紀元前175～118年に造られた墓で、被葬者は不明であるが、第３代楚王の劉戊ではないかと考えられている。墓は崖洞で、埋葬後すぐに

第５図　亀山漢墓

盗掘されている。埋葬施設には覆い屋が設けられ保存されている。

11月26日(第６日)

開館時間にあわせて徐州博物館に向かったが、まだ開館しておらず博物館の裏側にある土山漢墓を先に見学した。

博物館の北側にある土山漢墓は、東漢(後漢)に造られた墳墓である。墳形は円形で直径約70m、高さは約18mである。墳丘の盛土は版築で、内部構造は磚室墓である。磚室墓は２基確認されており、1970年には１号墓が南京博物院によって発掘されている。

その後、徐州博物館を見学した(第６図)。博物館は、江蘇省北西部の徐州市の南郊外にある雲竜山の北麓に所在する。博物館は1960年に開館した当初、清代の乾隆皇帝が1757年に行幸した行宮の建物を陳列館として使用していたが、1999年5月にその西側に近代的な建物の新館を建築しリニューアルオープンした。

展示物は徐州の文物(主に漢代)が集められ、１～３階の展示フロアは、玉類・金属類・土器類・絵画・家具などのテーマごとに展示室が分けられている。考古学関係では漢墓から出土した文物が中心であった。見学後、徐州を離れ再び南京へと向かった。

11月27日(第７日)

南京市内のホテルから金壇市へ移動し、三星遺跡を見学した(第７図)。この遺跡は24日に南京博物院で遺物を見学した遺跡である。遺跡は三星村の小高い丘の上に立地している。推定範囲は10万m^2である。遺跡がある丘は竹林になっており、用水路を掘った際に遺物が出土し遺跡が確認された。遺跡は発掘調査後は畑地となっている。その後、上海に向けて移動した。

11月28日(第８日)

日本に帰国するため、朝9：00頃に上海のホテルを出発して、上海浦東空港を12：35(現地時

第６図　徐州博物館

第７図　三星遺跡遠景

間)に離陸し中国を出国した。関西国際空港へは15：25(日本時間)に到着した。帰りは何のトラブルもなく無事到着した。税関検査などの手続きを終え、16：00に解散となった。

３．研修を終えて

今回の研修は、日本国内ではあまり知られていない遺跡を見学することができた。個人の旅行ではまず行かない地域での遺跡見学で、非常に有意義な研修であった。

また、参加者の所属する財団が近畿ブロックから全国に拡大したことで多くの方と交流がもて、さまざまな情報を得ることができた。研修の行程が現地に着いてから大幅に変更になり、各遺跡・博物館の見学時間が短くなったのは残念であったが、数多くの地域と遺跡を見学することができた。

今回の研修で、日本国内のさまざまな文化の源流が中国にあることや、スケールの違いを再確認することができた。日本国内において発掘調査に従事している我々にとって、もっと大きな視野をもって考えていかなければいけないと感じた。最後に研修の全行程にわたって同行し案内していただいた南京博物院の王根富氏に深く感謝したい。

（むらた・かずひろ＝調査第２課調査第３係調査員）

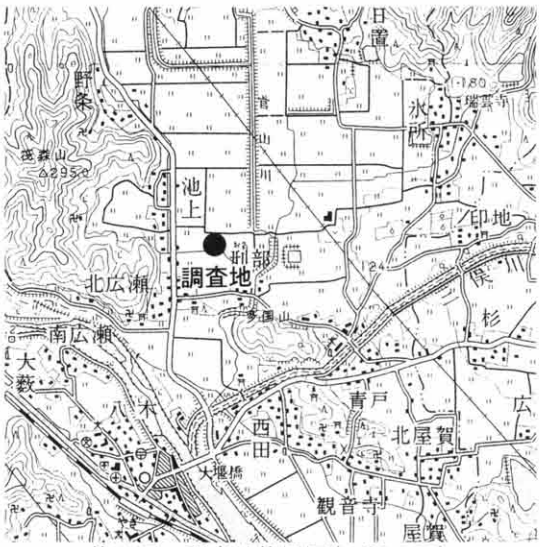
19. 池上（いけがみ）遺跡第８次・池上古里（いけがみこさと）遺跡第２次

所 在 地　船井郡八木町池上

調査期間　平成12年11月１日～平成13年２月27日

調査面積　約2,000m²

はじめに　池上遺跡は、東西約550m、南北約600mの範囲で広がる弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。過去７回にわたる試掘・発掘調査が実施され、弥生時代中期の方形周溝墓や竪穴式住居跡・溝跡と、古墳時代後期の竪穴式住居跡などが確認されている。池上古里遺跡は、池上遺跡の南東に隣接する遺跡で、試掘調査で確認された新たな遺跡である。東西約200m、南北約50mの範囲と推定されている。今回の調査は、池上遺跡の南端部と池上古里遺跡の範囲に、南丹区域農用地総合整備事業が計画されたため、緑資源公団西部支社の依頼を受けて実施したものである。



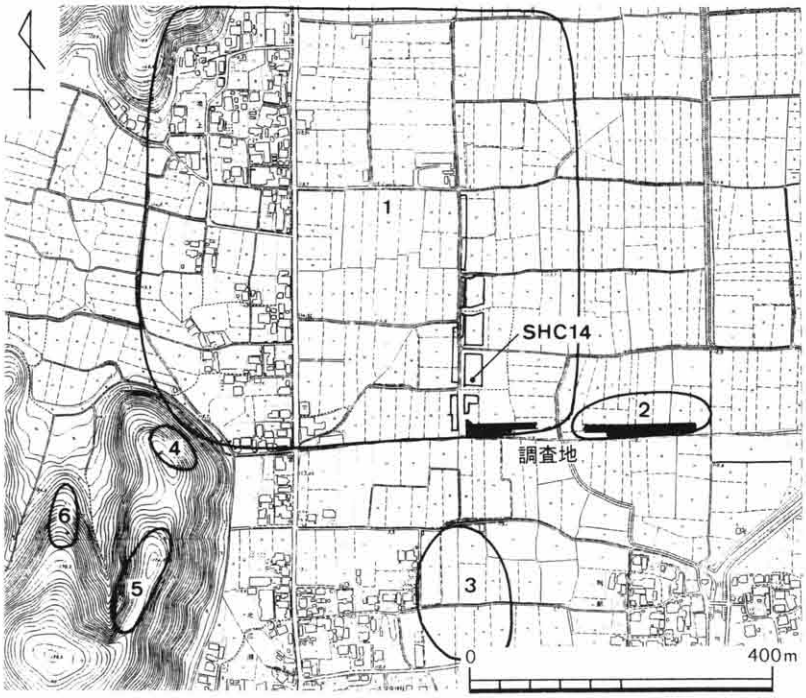
第１図　調査地位置図(1/50,000)

調査概要　調査の結果、池上遺跡では、弥生時代中期の竪穴式住居跡２基、土坑３基、溝跡４条と古墳時代後期の竪穴式住居跡10基、溝跡１条を検出した。池上古里遺跡では、古墳時代の竪

竪穴式住居跡一覧表

遺構名	平面形態	規模	主軸方位	備考	遺構名	平面形態	規模	主軸方位	備考
ＳＨ01	方形	４×４ｍ	N7°Ｗ	北辺中央に竈あり	ＳＨ115	方形	４×４ｍ	N5°Ｗ	
ＳＨ02	方形	6.5×？ｍ	N0°	北辺中央に竈あり	ＳＨ116	方形	5.5×4.4m	N7°Ｗ	
ＳＨ107	方形	？×2.5m	N6°Ｗ		ＳＨ102	方形	５×4.4m	N5°Ｗ	北辺付近に竈あり
ＳＨ108	方形	8.4×？ｍ	N4°Ｗ	床面に焼土	ＳＨ137	方形	3×？ｍ	N19°Ｅ	北東隅に竈あり
ＳＨ110	方形	6.6×？ｍ	N6°Ｗ		ＳＨ122	円形	推定直径7.4m		
ＳＨ109	方形	５×５ｍ	N6°Ｗ		ＳＨ140	円形	直径7.7m		玉生産関連遺物出土

（遺構名は、調査時に付したものを使用した。）



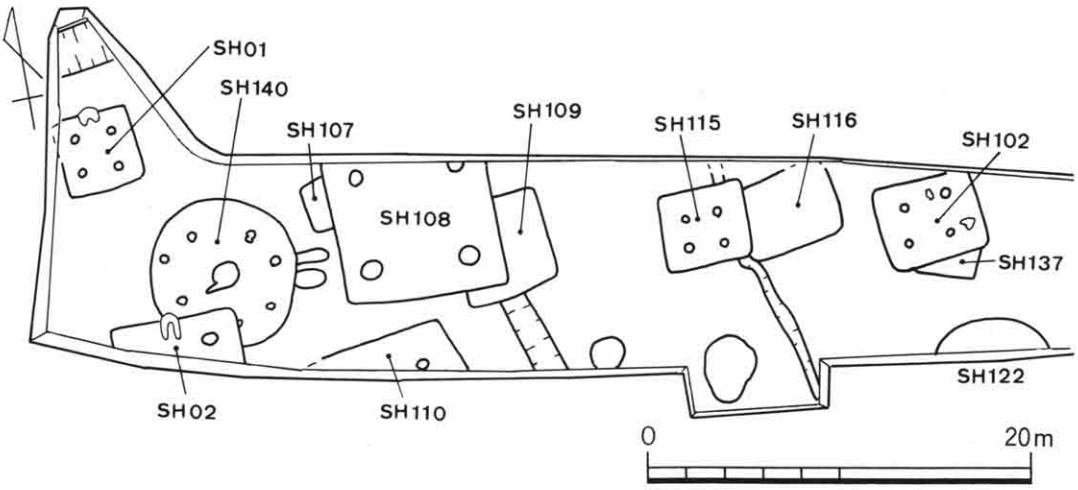
第２図　調査地および周辺遺跡分布図
1.池上遺跡　2.池上古里遺跡　3.西里遺跡
4.寺内東古墳群　5.北広瀬城古墳群　6.南尾東古墳群

穴式住居跡４基、土坑などを検出した。

池上遺跡のＳＨ140は、径7.7ｍを測る弥生時代中期の円形住居跡で、少量であるが玉作り関連遺物が出土している。主柱穴は、周壁から約1.2ｍ内側に７か所配されていた。第４次調査時に径約４ｍの玉作り工房跡（ＳＨＣ14）が確認されており、亀岡市に所在する余部遺跡とともに丹波地域での主要玉作り遺跡と言える。古墳時代後期には、一辺8.4ｍを測る大型の住居（ＳＨ108）も営まれる。この住居の主柱穴は径約１ｍを測り、住居中央床面から焼土を確認した。また、一辺約４～５ｍの竪穴式住居跡（ＳＨ01・02）の北辺には、竈が良好な状態で遺存していた。池上古里遺跡で確認した住居跡は、池上遺跡では確認されていない古墳時代前期のもので、遺構密度も希薄となる。

まとめ　今回得た調査成果は、すでに確認している成果を補足することになった。なお、古墳時代については、亀岡市の鹿谷遺跡や日吉町の天若遺跡に次いで、丹波地域の主要集落遺跡の一角を確認する結果となった。また、遺構は、南に広がる様相が見られ、南接する西里遺跡との関連も注目される。

（田代　弘・岡崎研一・野島　永）



第３図　池上遺跡遺構配置図

20. 佐山（さやま）遺跡第２次（Ｂ－１地区）

所 在 地　久世郡久御山町佐山新開地

調査期間　平成12年10月２日～平成13年２月27日

調査面積　約2,700㎡

はじめに　佐山遺跡は、旧巨椋池と木津川にはさまれた山城盆地内でも最も海抜が低い土地に立地する。調査は、第二京阪道路および京都南道路建設に伴い、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。

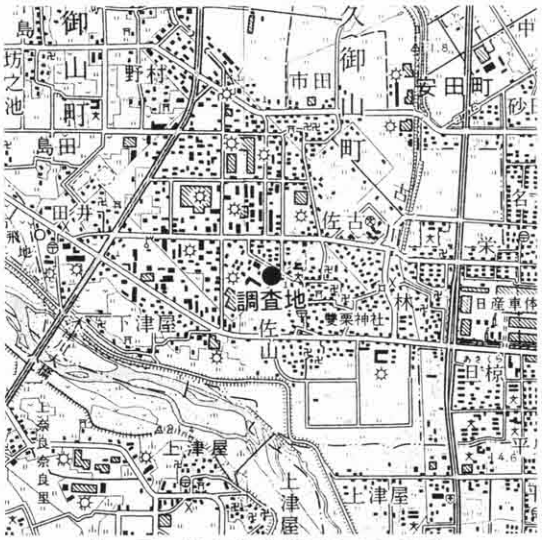
調査概要　主な遺構としては、調査区東部を南北に貫く濠（ＳＤ５）と、これと同時期と見られる掘立柱建物跡２棟（ＳＢ１・２）などを検出した。ＳＤ５は、幅約７～８ｍ、深さ約1.4ｍを測るが、南部ではやや幅・深さともに規模が大きくなり、幅11.5ｍ、深さ約2.1ｍを測る。埋土は大きく４層に分かれる。下半部の２層は濠が機能していた時期の堆積土で、鎌倉時代前半までの遺物を多量に含む。ＳＤ５から出土した土器類の大半は、瓦器椀・土師器皿・瓦質土器羽釜などの在地産の日常雑器が中心であるが、褐釉陶器壺・青白磁合子など中国陶磁器も見られる。

ＳＤ５の東に沿って幅0.5ｍ程度の南北方向の溝が３条程度検出されたが、これらは坪境道側溝であり、溝とＳＤ５の間が里道と考えられる。溝は、基本的には東から西へとわずか位置を変えて掘り直されており、東側の区画が里道を侵して徐々に広げられて行った様子が窺える。

掘立柱建物跡（ＳＢ１・２）はＳＤ５の西側で南北に並んで検出された。ＳＢ１は東西３間・南北４間、ＳＢ２は東西３間・南北３間で、いずれも総柱建物である。

このほか、江戸時代の溝（ＳＤ１～３）なども検出されている。

まとめ　ＳＤ５は、北隣の坪にあたるＡ－２地区で検出された里道の延長線上に位置する。Ａ－２地区で濠が検出されていないこと、および、ＳＤ５の東に里道が位置することから、ＳＤ５はＡ－２地区との間にある坪境で西に曲がっているものと考えられる。また、南隣のＢ－２地区における試掘調査で、これにつながると見られる東西方向の濠が１坪分南の坪境付近から検出されている。したがって、ＳＤ５は、Ｂ－１地区で検出された里道西側の坪を「コ」字形に囲んでいることが想定され、この地にあった屋敷地もしくは集落

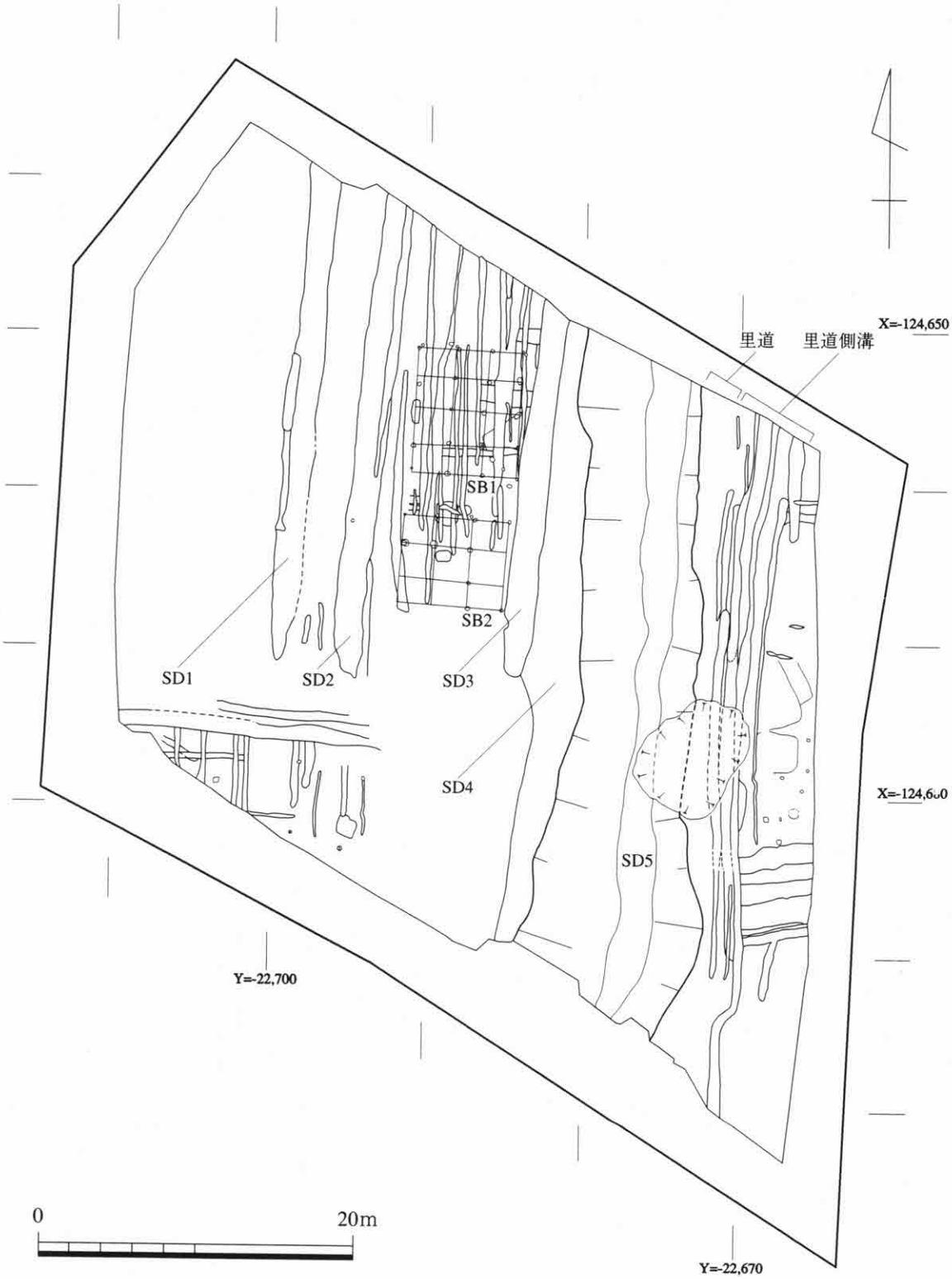


第１図　調査地位置図（1/50,000）

を囲む環濠と考えることができる。

ＳＤ５は、鎌倉時代の濠としては極めて大規模であり、当遺跡は周辺の集落史を明らかにするうえで極めて重要な遺跡である。今年度実施されているＢ－２地区の調査が大いに期待される。

（森島康雄）



第２図　調査区平面略図

21.内里八丁遺跡（うちさとはっちょう）

所 在 地　八幡市内里

調査期間　平成12年12月20日～平成13年２月27日

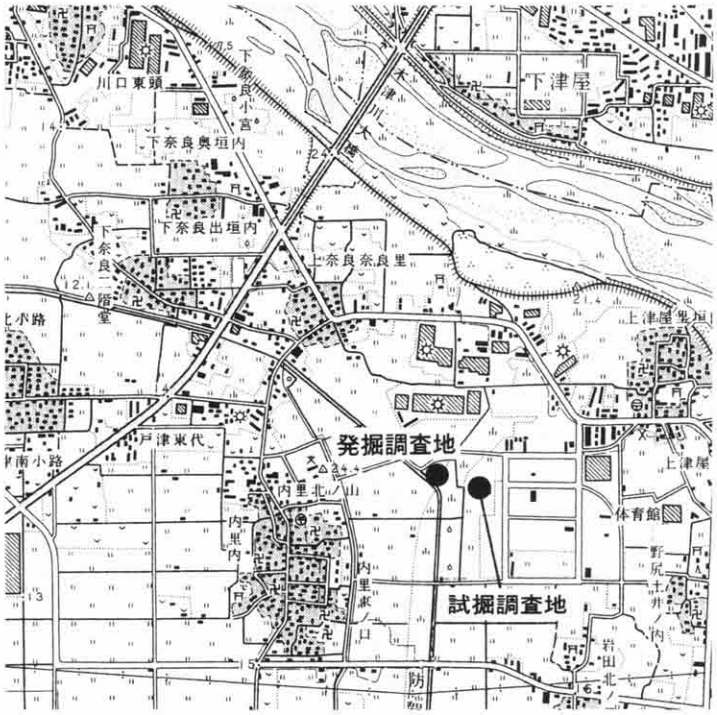
調査面積　約1,000㎡

はじめに　今回の調査は、府道八幡木津線の整備事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。この遺跡は、木津川西岸の自然堤防上に営まれた、弥生時代から中世にいたる複合集落遺跡である。これまで、第二京阪道路の建設に伴う調査で、弥生時代の水田跡や各時代の集落跡・古山陰道の跡などが確認されている。

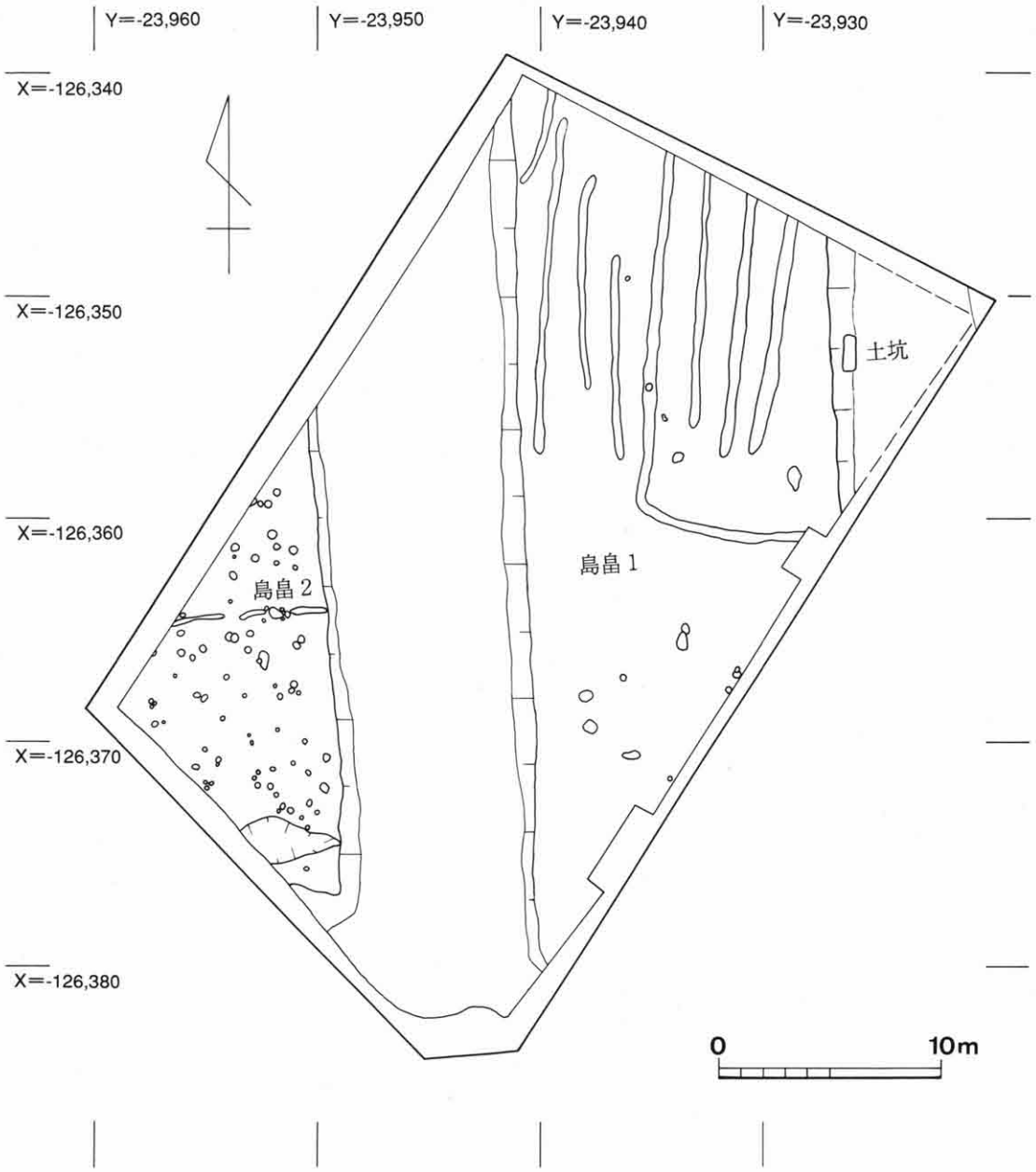
今回の調査地は、第二京阪道路の東西に隣接する地点である。東側では遺構・遺物の残存の有無を確認するための試掘調査、西側では面的な発掘調査を行った。なお、今年度、西側発掘調査地では、第１遺構面(中世)の完掘および第２遺構面(奈良～平安時代)の遺構確認を目的として調査を行った。

調査概要　試掘調査は、道路予定地に２か所のトレンチを設定して実施した。試掘面積は、あわせて約100㎡である。両トレンチとも島畠の肩部およびその間の低地部分に相当する。各トレンチで、それぞれ溝状遺構や柱穴とみられるピットを検出した。これらの遺構は、明確な出土遺物がないため、時期は不明である。

発掘調査では、道路予定地に約900㎡の調査区を設定して、掘削・精査を行った。この調査区では南北方向の島畠２か所(島畠１・２)を確認した。これらの島畠では、柱穴とみられるピットや耕作に伴う溝などを検出した。出土遺物は、瓦器椀・土師器皿・中国製白磁などであり、これらの検出遺構は、ほぼ12世紀以降の中世のものと考えられる。また島畠１東縁部で、長方形土坑を検出した。形態的には中世の墓壙とも考えられるが、出土遺物がないため、その時期・性格は不明である。



第１図　調査地位置図(1/25,000)



第2図　発掘調査区平面図

さらに、8世紀～9世紀頃の土師器・須恵器が出土する遺構を検出しており、これは、第2遺構面の遺構に相当するものと考えられる。また、部分的な断ち割りでは、中世から弥生時代に至るものとみられる4面の遺構面を確認している。

まとめ　今回の調査において、試掘地点では、時期などは不明であるが遺構を検出しており、調査地周辺に何らかの遺跡が残存しているものと考えられる。また、トレンチ間に存在する島畠部には、何面かの遺構面が残存している可能性もある。発掘地点では、中世の集落に関連するとみられる遺構を多数検出した。また、下層にも遺構が存在することも確認している。なお、この調査地内には、古山陰道のルートも想定されており、今後の調査が注目される。　（引原茂治）

22.椋ノ木遺跡第４次

所 在 地　相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木

調査期間　平成12年12月18日～平成13年３月５日

調査面積　約1,100㎡

はじめに　今回の調査は、木津川上流流域下水道木津川上流浄化センター水処理施設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は精華町東南部に位置し、木津川左岸の微高地上に立地する。この木津川に伴う自然堤防上に中世の遺構が展開していることが、過去の調査で判明している。今回の調査では、遺構の範囲を確定することを目的として、消化タンク建設に伴う試掘調査(第８トレンチ)と、水処理施設に伴う試掘調査(第９トレンチ)を行った。

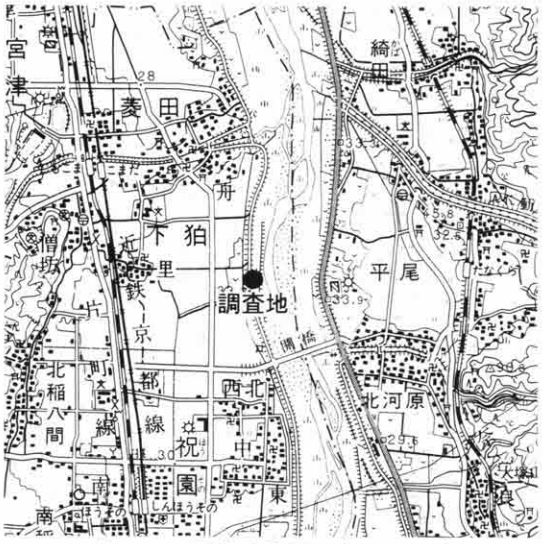
調査の成果　中世の遺構面に加え、古墳時代前期と、縄紋時代晩期の遺構面を新たに確認することができた。今回は第８トレンチの成果を中心にその概略について述ることとする。

中世の遺構については、過去の調査で屋敷墓が検出されるなど、中世の集落を復原する貴重な成果があがっている。第８トレンチは、第３次調査の第７トレンチに隣接し、この時期の遺構が検出されることが予測された。中世の遺構の多くは方格地割に沿った東西方向の素掘り溝である。旧地形は、南から北へゆるやかに傾斜しており、標高25.5m前後で中世の遺構面を確認した。

ＳＸ42は、南北約13m、東西5.5m以上の区画溝である。この南北溝は方格地割の二等分線上にほぼ相当する。この区画溝の内側には、高さ約0.5mの土檀状の高まりを確認した。東西方向の区画溝は、第７トレンチのＳＤ01の延長にあたるが、以前の調査では高まりは検出されていないため、東西長は最大でも10m前後とみられる。この溝は少なくとも２回の再掘削が行われている。

中世の遺構面は、遺構の範囲確認のために設定した、８－１～８－４トレンチの全域で確認できた。遺構は現在の木津川堤防沿いの流路近くまで広がっている。

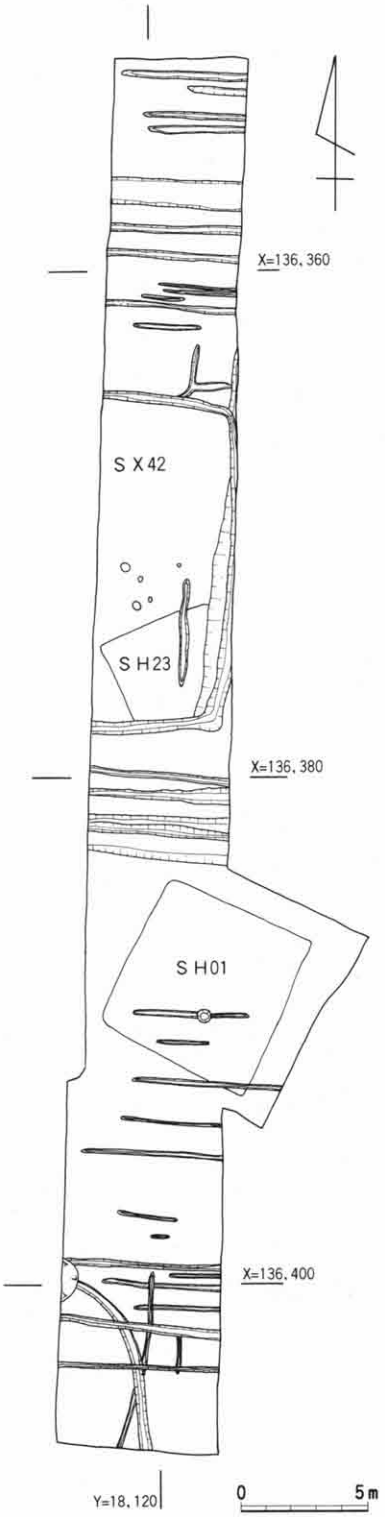
古墳時代前期の遺構は、中世の遺構面から約20cm下層で検出した。今年度は、検出した竪穴式住居跡２基のうち、ＳＨ01のみを調査した。ＳＨ01は、一辺約６ｍの隅丸方形の竪穴式住居跡で、掘形底面まで約30cmが残存していた。主柱穴は４本で、いずれも床面から90cm近くまで掘形を掘り込んで据えられていた。柱痕跡も明瞭に観察する



第１図　調査地位置図(1/50,000)

ことができ、柱の据え直しは行われていないものと判断できた。

住居跡の中央部では、被熱が原因とみられる硬化面が認められた。周辺から滓などの遺物は確認できておらず、製鉄関連遺構となる可能性は低いが、硬化面の状況から被熱は複数回にわたるものと判断される。こうした硬化面は、住居跡中央以外にもその隣接した西側でも確認された。住居跡の埋土からは、土器片と焼土、炭化物が出土しており、こうした被熱を伴う作業は、この住居跡が廃絶した後にも周辺の住居跡で続けられ、廃絶後のＳＨ01が廃棄土坑として利用されていたものと判断できる。



第２図　第８トレンチ遺構配置図

住居跡には周壁溝と、さらに内側をめぐる区画溝が掘削されていた。周壁溝と区画溝は、ともに貼り床の上面から掘削されており、同時に機能していたものと考えられる。この溝は、住居跡の東部で分岐して、住居跡の内部へとのびており、住居内部の区画か排水が目的とみられる。区画溝の検出状況は、ところどころ途切れるが、住居跡が機能していた段階では、全周していたものと考えられる。

縄紋時代の遺構は、古墳時代の遺構面からさらに約20cm下層で検出した。ピットを検出した時点で調査を終了したため、時期は確定できないが、周辺から突帯紋土器が出土しており、晩期の遺構が周辺で確認される可能性が高い。これまで、周辺地域では当該期の遺構が知られておらず、貴重な成果となった。

これらの成果以外にも、遺構の有無を確認するために設定した８－２トレンチから、流紋岩製石庖丁が出土している。残念ながら遺構に伴わないため時期は不明であるが、古墳時代の遺構面より下で出土しており、後世の流れ込みではない。今回の調査では、弥生土器は１片も出土していないが、今後この石庖丁の時期の遺構もあわせて検出される可能性がある。

まとめ　今年度の調査では、これまで知られていた中世以前にも、周辺に遺構が存在することが確実となった。

特に古墳時代前期の竪穴式住居跡では、継続的に被熱を伴う作業が行われた形跡があり、周辺でさらに遺構が検出される可能性が高い。

また、遺構は確認できなかったが、石庖丁の存在から、弥生時代の遺構が検出されることも期待される。椋ノ木周辺では、断続的ではあるが、縄紋時代から現代までの生活跡が確認できる、南山城では稀少な遺跡であることが明らかとなった。

（藤井　整）

23.木津城山（きづしろやま）遺跡第４次

所 在 地　相楽郡木津町大字木津小字片山

調査期間　平成12年５月8日～平成13年２月27日

調査面積　約2,000㎡

はじめに　木津城山遺跡の調査は、「関西文化学術研究都市」の整備事業に伴い、都市基盤整備公団の依頼を受けて実施したものである。

木津城山遺跡の調査は、これまでに３回行われており、今回は第４次調査となる。これまでの調査によって、竪穴式住居跡や段状遺構などが多数見つかっており、出土した遺物から弥生時代後期前半ごろの高地性集落であることが明らかになっている。

今回の調査は、昨年度の第３次調査の成果を受けて、これまでほとんど調査されていなかった丘陵斜面について調査を実施したものである。調査地は、第１次・第２次調査地の東側の丘陵斜面にあたる。

調査の概要　調査地は、標高85～100ｍを測るやや急傾斜な丘陵斜面に立地する。ここにＡ・Ｂ・Ｃの３つの調査地区を設定した。いずれの調査地区でも竪穴式住居跡や段状遺構などが検出された。これらの遺構は、出土した遺物から、これまでと同じく弥生時代後期のものと考えられる。また、Ｂ地区では、時期は不明ながら、丘陵斜面を加工して造られた平坦面が検出された。

Ａ地区では、竪穴式住居跡や段状遺構が合計７基検出された。これらは、いずれも、標高の高い側を掘り下げたもので、その全体の形状を知ることができるものは検出されなかった。また、南東端で幅約2.5ｍの平坦面が検出されたが、Ｂ地区で検出された平坦面ＳＸ239に対応すると考えられる。

Ｂ地区では、竪穴式住居跡・段状遺構のほか丘陵斜面を加工して造られた平坦面が検出された。竪穴式住居跡・段状遺構は、１次・２次調査で一部のみが検出されていたものの全容を確認したほか、新たに３ないし４基の段状遺構を検出した。新たに検出した段状遺構はいずれも小規模なもので、Ａ地区同様、標高の高い側のみが遺存していた。

調査地位置図(1/50,000)

平坦面は３段検出した（ＳＸ238・239・241）。

平坦面ＳＸ240は、標高94m付近に認められ、検出長28m、幅0.4～1.6mを測る。この平坦面よりも上方に竪穴式住居跡や段状遺構が検出されたことから、居住域と丘陵斜面とを区切る役割を果たしていたのではないかと考えられる。この平坦面に伴うわずかな遺物や、検出された状況などから、竪穴式住居跡などと同時期の弥生時代後期ものと考えられる。平坦面ＳＸ238は、標高91m付近に認められ、検出長14m、幅0.8～1.2mを測る。平坦面の周辺からは多くの弥生時代後期の土器が出土したが、いずれも平坦面から遊離したり、平坦面以前の堆積土中から出土しており、平坦面ＳＸ238が造られた時期を明らかにすることはできなかった。平坦面ＳＸ239は、標高87m付近に認められ、検出長38m、幅1.6～2.2mを測る。平坦面ＳＸ238・240にくらべ、幅が広い。丘陵側が若干低くなり、溝状を呈する箇所もある。平坦面の下方の谷部分で少量の弥生土器や須恵器の細片が出土しているが、平坦面ＳＸ239に伴う遺物はなく、造られた時期は不明である。なお、平坦面ＳＸ238と平坦面ＳＸ239は堆積状況から同時に存在したのではなく、平坦面ＳＸ239が古く、平坦面ＳＸ238が新しいことを確認した。以上の平坦面は、各平坦面間を、自然地形のままではなく、斜面をより急峻にするための人為的な加工が加えられているようである。

Ｃ地区は、Ａ・Ｂ両地区にくらべると傾斜が緩く、多数の遺構の存在が予想された。しかし、調査の結果、竪穴式住居跡２基を検出したのでみである。竪穴式住居跡ＳＢ235は、調査区の南端で検出したもので、「コ」字状にめぐる周壁溝を確認した。一辺４ｍを測る。埋土から弥生土器が出土し、弥生時代後期と考えられる。竪穴式住居跡ＳＢ236は、一辺4～4.2mを測る方形の住居跡で、周壁溝や柱穴を確認した。埋土から多数の弥生土器が出土し、弥生時代後期と考えられる。これまで検出されている竪穴式住居跡の中でも比較的遺存状態の良好な住居跡である。

まとめ　今回の調査で明らかになった点をまとめると以下の通りである。

①平坦面について　調査の結果、Ｂ地区で、合計３段の平坦面を検出した。その詳しい時期を今回の調査では明らかにできなかったが、弥生時代後期の高地性集落と中世山城のどちらかに伴う可能性が高いと考えられる。また、これまでの調査成果と合わせると、このような平坦面が、遺跡の所在する丘陵全体をめぐっている可能性もある。今後の木津城山遺跡の調査においては、この平坦面がいつの時代のものであるのか、また、どのくらいの規模を有するものであるか、明らかにしていく必要がある。

②高地性集落について　新たに竪穴式住居跡・段状遺構などが多数検出され、木津城山遺跡において確認された住居跡や段状遺構の総数は40基を越える。これらがすべて同時に存在したわけではないが、相当に規模の大きな集落のようすをうかがうことができる。特に、Ｃ地区の南端で竪穴式住居跡が検出されたことから、集落の規模がさらに南にのびる可能性がある。これまでの調査成果を合わせると、木津城山遺跡は弥生時代後期前半ごろに営まれた高地性集落と評価できる。また、遺跡のほぼ中央には、中世の山城である木津城の主郭部分が非常に良好な状態で保存されているが、これまでの調査では木津城に関連する明確な遺構は見つかっていない。

（筒井崇史）

長岡京跡調査だより・77

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成13年２月27日・３月28日・４月25日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内２件、左京域５件、右京域12件であった。京域外の３件を併せると、合計22件となる。

調査地一覧表(2001年４月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第403次	7ANDST-7	向日市森本町下森本47-77他	(財)向日市埋文	1/23～1/25
2	左京第459次	7ANFKD-5	向日市上植野町北ノ田5-1	(財)向日市埋文	1/30～2/28
3	左京第460次	7ANDTK-9	向日市森本町高田11･12番地	(財)向日市埋文	2/1～2/21
4	左京第462次	7ANEUK-3	向日市冠鶏井町馬司18	(財)向日市埋文	3/9～6/8
5	右京第689次	7ANBKJ	向日市寺戸町古城13番地	(財)向日市埋文	12/20～01.2/20
6	右京第693次	7ANBKJ-2	向日市寺戸町古城13番地	(財)向日市埋文	2/21～3/19
7	右京第698次	7ANBNO-6	向日市寺戸町西野33の16	(財)向日市埋文	4/9～4/20
8	修理式遺跡 第６次	3NSBSS-4	向日市寺戸町修理式10-1	(財)向日市埋文	2/16～3/14
9	右京第688次	7ANKHT-6	長岡京市開田4丁目15	(財)長岡京市埋文	12/18～01.3/9
10	右京第690次	7ANQKB-1	長岡京市久貝三丁目13-3	(財)長岡京市埋文	2/2～2/21
11	右京第691次	7ANGND-2	長岡京市西の京15-3.15-96	(財)長岡京市埋文	2/13～3/26
12	右京第692次	7ANITT-16	長岡京市今里4丁目	(財)長岡京市埋文	2/19～3/15
13	右京第694次	7ANGKH-1	長岡京市井ノ内北内畑24-1	(財)長岡京市埋文	3/1～3/27
14	右京第695次	7ANOSZ-2	長岡京市下海印寺西明寺65	(財)長岡京市埋文	3/19～5/7
15	右京第696次	7ANMWY-7	長岡京市神足１丁目601-10	(財)長岡京市埋文	4/9～6/4
16	右京第699次	7ANKNZ-12	長岡京市天神１丁目4-7	(財)長岡京市埋文	4/20～5/21
17	光明寺古墳 第３次調査	4PKHSU-3	長岡京市粟生西条内31-1	(財)長岡京市埋文	2/5～2/16
18	山城国府跡 第63次調査	7XYSEG-5	大山崎町字大山崎小字 永福寺12-2	大山崎町教委	1/8～1/17
19	左京第461次	7AN-1	京都市伏見区羽束師清水町	(財)京都市埋文研	1/29～2/16
20	左京第454次	7ANVMK-5	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文研	10/11～01.1/20
21	下植野南遺跡		大山崎町下植野門田地内	(財)京都府埋文	4/11～01.3/9
22	右京第697次	7ANIUC-4	長岡京市天神４丁目87･88番地	(財)京都府埋文	4/16～6/30

長岡京跡発掘調査抄報

12年度後半の調査の中で大いに注目された右京第688次調査(大量の文字資料出土)、右京第689次調査(大規模な祭祀跡)の2件について紹介する。

右京第688次調査　調査地は右京六条二坊五町に推定される。検出遺構には六条条間南小路の北・南側溝とこれに付随する桝状遺構(利水、防火用水溜め)、六町内では柵・門・暗渠溝・井戸・大型土壙などがある。北側溝の先述の桝状遺構からは木簡、絵画薄板、漆紙文書、墨書土器などの文字資料が出土した。木製品には人形・斎串・櫛・曲物・大量の桜樹皮・木皿・箸・桧扇・漆器・独楽・楊枝・不明木製品などがある。土製品には須恵器・土師器・黒色土器など、土器類が多数を占める。その他、丸鞆(石製品)・銅製鈴(金属製品)・神功開寳などが出土している。これらの調査結果から長岡京西市に関連する役所、工房跡の存在が想定されるに至った。

木簡72点のうちでは荷札が多数を占める。延暦八年(1点)、十年(3点)、十一年(3点)の紀年木簡があった。「武義郡」(美濃国)の郡郷名などがほかに3点あった。人名は「酒部安万呂、物部吉万呂」など10点以上あった。漆紙文書には人名や年齢、「疾」などが認められ、当時の戸籍台帳であると考えられる。絵画薄板には相対する2羽(牡と雌か)の鳥(松くい鳥)が松枝をくわえた図柄が描かれている。これは祭祀画でなく、何らかのデザイン画として描かれた非常に珍しい遺物と思われる。

調査担当者は、今回の調査成果について、「長岡京の西市に関連する公的機関と生産工房の存在したことを示す」だけでなく「都城における市の変遷や役割を検討する上できわめて重要な発見」との見解を示している。

右京第689次調査　調査地は宮域の北西の右京一条二坊七町に推定される。周辺には五塚原古墳や火葬墓跡があり、「寺戸城」も想定される。調査の結果、等高線に平行した幅1.2～2.0m、深さ0.5mの人工的な溝跡が検出された。溝には炭化物・焼土が厚く堆積し、近くで火を使用した可能性がうかがえる。溝跡とそこから出土した夥しい遺物から、長岡京期の祭祀跡であることが確認された。

遺物には祭祀具の土馬・ミニチュアの竈や鍋・祭祀用土師器(墨書人面土器)・須恵器(杯・壺)・土師器(高杯・甕・壺)・瓦などがある。遺物の量は土馬・ミニチュア竈・鍋など祭祀に関連する遺物が圧倒的に多い。出土状況は、溝の北肩(宮域側)の窪んだ所に集中する傾向があり、この3種が同個体数でセット関係を成している。土馬については、破砕されているのが常であるが、当遺跡では完存品が多いのが特筆される。

この祭祀跡は、祓(はら)えや禊(みそぎ)と呼ばれる水辺に係わる「マツリ」を行った遺跡であるとともに、「国家的規模の祭祀遺構」である可能性が、出土した地点・遺物の様相から想像される。その内容については、「京果てのマツリ」或いは、五塚原古墳が近隣にあることから都の造営に伴う「鎮魂のため」の解釈も指摘されているが、発掘担当者は現時点では前者の「京果てのマツリ」の可能性が高いと考えている。

(竹井治雄)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

（平成13年4月1日現在）

理事長

樋口　隆康

（京都大学名誉教授）

常務理事

中谷　雅治

理　事

川上　　貢

（京都府文化財保護審議会会長職務代理・京都大学名誉教授）

上田　正昭

（京都府文化財保護審議会会長・京都大学名誉教授）

藤井　　学

（奈良大学学長・京都府立大学名誉教授）

佐原　　眞

（国立歴史民俗博物館館長）

中尾　芳治

（帝塚山学院大学文学部教授）

井上　満郎

（京都産業大学文化学部教授）

都出比呂志

（大阪大学大学院文学研究科教授）

高橋　誠一

（関西大学文学部教授）

三品　廣実

（京都府府民労働部文化芸術室長）

太田　信之

（京都府教育庁指導部長）

杉原　和雄

（京都府教育庁指導部文化財保護課長）

監　事

塩見　司郎

（京都府出納管理局長）

竹延　信三

（京都府監査委員事務局長）

事務局長	中谷　雅治	
事務局次長	福嶋　利範	
総務課	課　　長	福嶋　利範（兼）
	主　　幹	安田　正人
	総務係長	安田　正人（事務取扱）
	主　　任	杉江　昌乃
	主　　事	今村　正寿　鍋田　幸世
		平木　紀子　鈴木　直人
	主査調査員	橋本　清一
		（府立山城郷土資料館へ派遣）
調　査	課　　長	小山　雅人
第1課	主　　幹	久保　哲正
	企画係長	久保　哲正（事務取扱）
	専門調査員	竹井　治雄
	資料係長	小山　雅人（事務取扱）
	主任調査員	松井　忠春　田中　　彰
	調査員	森島　康雄
調　査	課　　長	平良　泰久
第2課	課長補佐	奥村清一郎　水谷　壽克
	調査第1係長	水谷　壽克（兼）
	主任調査員	戸原　和人　田代　　弘
	専門調査員	石尾　政信
	調査員	石崎　善久　福島　孝行
		中島　史子
	調査第2係長	伊野　近富
	主任調査員	引原　茂治　小池　　寛
	主査調査員	岡崎　研一　黒坪　一樹
	調査員	中川　和哉　筒井　崇史
	調査第3係長	辻本　和美
	主任調査員	竹原　一彦　岩松　　保
	主査調査員	伊賀　高弘
	調査員	野島　　永　野々口陽子
		村田　和弘
	調査第4係長	奥村清一郎（兼）
	主任調査員	石井　清司　増田　孝彦
	調査員	中村　周平　柴　　暁彦
		河野　一隆　藤井　　整

センターの動向(01．2～4)

1．できごと

2．5　内田山遺跡(木津町)発掘調査開始

7～8　公益法人等運営協議会(於：南山城村)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、安田正人総務課主幹出席

9　木津城山遺跡(木津町)現地説明会

10～11　埋蔵文化財研究会第49回研究集会(於：長崎県)野島永調査員出席

14　樋口隆康理事長、女谷横穴群(八幡市)現地視察

15　教育関係法人職員合同研修会(於：京都府庁西別館)福嶋利範事務局次長、平良泰久調査第2課長、安田正人総務課主幹出席

池上遺跡・池上古里遺跡(八木町)現地説明会

16　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：枚方市)木村英男常務理事・事務局長、安田正人総務課主幹出席

職員研修(於：当センター)講師：福嶋利範事務局次長「臨時職員の雇用について」

20　都出比呂志理事、女谷横穴群(八幡市)現地視察

人権に関する職場研修(於：京都府乙訓総合庁舎)安田正人総務課主幹出席

23　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：大阪市)小山雅人調査第1課長、奥村清一郎調査第2課課長補佐出席

27　池上遺跡・池上古里遺跡(八木町)発掘調査終了(11.1～)

佐山遺跡(久御山町)発掘調査終了(5.1～)

上津屋遺跡(八幡市)関係者説明会、発掘調査終了(11.13～)

内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査終了(12.20～)

女谷横穴群(八幡市)発掘調査終了(8.2～)

木津城山遺跡(木津町)発掘調査終了(5.8～)

内田山遺跡(木津町)発掘調査終了(2.5～)

長岡京連絡協議会(於：当センター)

3．5　市田斉当坊遺跡(久御山町)発掘調査終了(1.11～)

椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査終了(12.18～)

9　下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査終了(4.11～)

16　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックＯＡ委員会(於：和歌山市)河野一隆、福島孝行調査員出席

職員研修(於：当センター)講師：村田和弘調査員「全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修報告：中国南京・徐州」

27　第61回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二

副理事長、木村英男常務理事・事務局長、上田正昭、藤井学、都出比呂志、井上満郎、中尾芳治、高橋誠一、三品廣実、津守俊一、中谷雅治理事出席

28　長岡京連絡協議会(於：当センター)

30　退職職員辞令交付

4．2　昇任・異動職員辞令交付

9　下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査開始

11　女谷・荒坂横穴群(八幡市)発掘調査開始

17　長岡京跡右京第697次・東代遺跡(長岡京市)発掘調査開始

市田斉当坊遺跡(久御山町)発掘調査開始

佐山遺跡(久御山町)発掘調査開始

18　内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開始

21　女谷横穴群(八幡市)現地説明会

25　長岡京連絡協議会(於：当センター)

26　中谷雅治常務理事・事務局長、女谷・荒坂横穴群ほか、現地視察

2．普及啓発事業

3．3　第89回埋蔵文化財セミナー開催(於：京都府立山城郷土資料館)『天平の三都』：久保哲正調査第2課主幹「天平の三都について」、芝野康之加茂町教育委員会生涯学習課課長補佐「恭仁京から紫香楽宮へ」、鈴木良章信楽町教育委員会生涯学習課文化財係長「紫香楽宮の発掘調査について」、佐藤隆大阪市文化財協会調査課調査員「難波宮跡の調査成果」

3．人事異動

3．31　中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、津守俊一理事、中谷雅治理事退任

森下衛主任調査員退職(京都府教育庁へ復職)、岡田正記主事退職(京都府教育庁へ復職)

4．1　中谷雅治常務理事・事務局長、太田信之理事、杉原和雄理事、塩見司郎監事就任

鈴木直人主事採用

受贈図書一覧(13. 2～4)

釧路市埋蔵文化財調査センター

釧路市大楽毛１遺跡調査報告書Ⅰ、海峡と北の考古学シンポジウム・テーマ１資料集Ⅰ、同２・３資料集Ⅱ

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査報告書第290集　底田(3)遺跡、同第291集　松ヶ崎遺跡、同第292集　蟹沢(2)遺跡、同第293集　宮本(2)遺跡、同第294集　栄山(3)遺跡、同第295　隠川(11)遺跡、同第296集　上野平(3)遺跡、同第297集　上野遺跡、同第298集　朝日山(2)遺跡、同第299集　桜ヶ峰(1)遺跡、同第300集　岩渡小谷(2)遺跡、同301集　岩ノ沢平遺跡Ⅱ、同第302集　上野尻遺跡Ⅱ、同303集　安田(2)遺跡、同304集　十腰内(1)遺跡Ⅱ、同第305集　笹ノ沢(2)・(3)遺跡、同第307集　三内丸山(6)遺跡Ⅲ、同第308集　畑内遺跡Ⅶ、紀要第６号

(財)茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第170集　中原遺跡、同第171集　下大井遺跡、同第172集　長野江向山遺跡、同第173集　津賀城跡、同第174集　熊の山遺跡、同第175集　島名前野遺跡、同第176集　鎌田遺跡、同第177集　愛宕山古墳、同第178集　殿開遺跡、同第179集　十万原遺跡１、同第180集　坂戸遺跡

(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団

殿坪遺跡、鹿島町の文化財第28集　鹿島町内遺跡発掘調査報告書Ⅳ、同第34集　鹿島城跡発掘調査報告書Ⅱ、同第58集　鹿島町内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ、同第59集　神野向遺跡Ⅶ、同第82集　道祖神遺跡発掘調査報告書、同第93集　鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告書ＸＶ、同第107集　六十六部塚、同第108集　鹿島城址Ⅴ、同第109集　鹿嶋市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書21

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

平成11年度地域教材開発研究・研究報告書

(財)千葉県文化財センター

千葉県文化財センター調査報告書第377集　船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点、同第378集　木更津市門田遺跡・和田山遺跡、同第379集　富津市堀口遺跡、同第380集　市原市天羽田稲荷山・袖ヶ浦市天羽田稲荷山遺跡、同第381集　袖ヶ浦市根岸根遺跡、同第382集　袖ヶ浦市西新田遺跡、同第383集　市原市中伊沢遺跡・百目木遺跡・下椎木遺跡・志保知遺跡・ヤジ山遺跡・細山(1)(2)遺跡、同第384集　木更津市金二矢台遺跡・堀ノ内台遺跡、同第385集　東峰御幸畑西遺跡、同第386集　十余三稲荷西遺跡、同第387集　山武町久保谷遺跡、同第388集　松尾町・山武町一本松遺跡・八街市板橋・滝台遺跡・ビンダライ遺跡、同第389集　東金市ヲフサ野遺跡・成東町上人塚遺跡、同第390集　芝山町浅間台遺跡、同第391集　芝山町山田宝馬古墳群、同第392集　鳴神山遺跡Ⅲ・白井谷奥遺跡、年報No.５、研究連絡誌第58号、同第59号、研究紀要21

(財)総南文化財センター

年報No.11

(財)山武郡市文化財センター

(財)山武郡市文化財センター調査報告書第29集　山荒久遺跡、同第39集　台前遺跡・上引切遺跡、同第62集　油井古塚原遺跡・滝木浦遺跡、同第63集　駒形台遺跡遺跡、同第67集　沓掛貝塚遺跡、同第68集　台前遺跡、同第69集　一本松遺跡、同第72集　西椎崎台遺跡、年報No.16、山武第２号

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第91集　川口町十内入東遺跡、同第94集　八王子市No.396遺跡、遺跡を翔けめぐる

(財)かながわ考古学財団

古代の大型建物跡－役所か邸宅か－記録集、年報７平成11年度、かながわ考古学財団調査報告41　宮ヶ瀬遺跡群ＸＶ、同51　宮ヶ瀬遺跡群ＸⅧ、同101　矢代遺跡、長柄・桜山第１・２号墳測量調査・範囲確認調査報告書、同103　田中・万代遺跡、同104　原口遺跡Ⅱ、同105　草山遺跡、同109　上木棚南遺跡第４次調査、同110　杉久保蓮谷遺跡、同111　三ヶ岡遺跡Ⅰ

(財)山梨文化財研究所

遺跡・遺物から何を読みとるか(Ⅳ)

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財発掘調査報告書48　裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保遺跡・上ノ原遺跡、同48　貫ノ木遺跡・西岡Ａ遺跡、同56　香坂山遺跡、紀要７、同８、年報15、同16

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集　平田遺跡、

同第102集　川根谷内墓所遺跡、同第103集　新保遺跡、研究紀要第３号

(財)岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書第35集　寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡、同第67集　中山道

各務原市埋蔵文化財調査センター

各務原市文化財調査報告第30号　ふな塚古墳発掘調査報告書、同第31号　大牧５号墳発掘調査報告書、同第32号　鵜沼古市場遺跡Ｂ地区発掘調査報告書、同第33号　北山古墳群発掘調査報告書

(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集　朝日遺跡Ⅵ、同第88集　下津北山遺跡、同第89集　岩作城跡・能見城跡

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

列島に華開く大窯製品

三重県埋蔵文化財センター

三重県埋蔵文化財調査報告115-17　六大Ａ遺跡発掘調査報告、同212-1　嶋抜、同214　コドノＢ遺跡(第２次・第３次)発掘調査報告、同216　北蟻越遺跡(第２次)・津賀古墳群発掘調査報告、研究紀要第10号

(財)滋賀県文化財保護協会

紀要第14号

守山市立埋蔵文化財センター

守山市文化財調査報告書第55冊　下長遺跡発掘調査報告書Ⅴ、同第59冊　小御門遺跡・阿比留遺跡発掘調査報告書、同第62冊　二ノ畦遺跡・酒寺遺跡発掘調査報告書、同第63冊　伊勢遺跡第28次発掘調査報告書、同第64冊　下長遺跡第15次発掘調査報告書、同第66冊　平成９年度国庫補助対象遺跡発掘調査報告書、同第70冊　赤野井遺跡発掘調査報告書、塚之越遺跡第13次発掘調査概要報告書、吉身西遺跡第70次発掘調査概要報告書

(財)栗東町文化体育振興事業団

栗東町埋蔵文化財発掘調査1999年度年報、1984年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集、邪馬台国時代の大型建物

(財)大阪府文化財調査研究センター

池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸⅣ、(財)大阪府文化財調査研究センター発掘調査報告書第28集　丹上遺跡、同第53集　大和川今池遺跡、同第54集　小島北磯遺跡、同第56集　佐保栗栖山砦跡、同第58集　椋谷石切場跡、年報平成11年度、大阪文化財研究第18号、同第19号、大阪府埋蔵文化財研究会(第42回)資料

(財)枚方市文化財研究調査会

枚方市文化財年報21、枚方市文化財調査報告第36集　田中家鋳物工場跡

高槻市立埋蔵文化財調査センター

高槻市文化財調査報告第22冊　高槻城キリシタン墓地、高槻市文化財調査概要ＸＸⅦ　嶋上遺跡群25、高槻市文化財年報平成11年度

神戸市埋蔵文化財センター

祇園遺跡第５次発掘調査報告書、若松町遺跡、勝雄遺跡Ⅰ、南僧尾、玉津田中遺跡発掘調査報告書、白水遺跡第３次・第６次・第７次・高津橋大塚遺跡第１次・第２次発掘調査報告、御蔵遺跡、平成５～８年度神戸市遺跡現地説明会資料集、同平成９・10年度、平成９年度神戸市埋蔵文化財年報、ゆの山御てん、神戸の古墳、色彩の考古学

奈良市埋蔵文化財調査センター

古代・中世のリサイクル、奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成10年度、同平成11年度、紀要1999、同2000

桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市内埋蔵文化財1997年度発掘調査報告書１、桜井市内埋蔵文化財1999年度発掘調査報告書１

倉敷埋蔵文化財センター

年報７平成11年度、板谷コレクション図録

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第190集　和田平遺跡発掘調査報告書、同第191集　上安井古墳発掘調査報告書、同第192集　福富中学校裏古墳発掘調査報告書、同第193集　迫田山遺跡発掘調査報告書、同第194集　柆原第２・３号古墳発掘調査報告書、同第195集　坂中組遺跡、同第196集　道木1/2号遺跡

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

野牛古墳・末３号窯跡、川西北・原遺跡　府中地区、金毘羅山遺跡Ⅰ・塔の山南遺跡・鹿の谷遺跡、西打遺跡Ⅰ、松並・中所遺跡、モノが語る歴史が変わる

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

埋蔵文化財発掘調査報告書第86集　道ヶ谷古墳・池の奥遺跡・平田七反地遺跡、同第87集　旦遺跡・宮之前遺跡・長沢石打遺跡・長沢１号墳他、同第88集　阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡他、同第89集　尼ヶ古城跡・かわらがはら窯跡、同第90集　松ノ元遺跡、同第91集　鶴が峠古墳

(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市埋蔵文化財調査年報12、松山市文化財調査報告書第79集　東雲神社遺跡、同第80集　斎

院の遺跡、同第81集　小野地区の遺跡、同第82集　東野中畦遺跡

福岡市埋蔵文化財センター

年報第19号

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第36集　嶋廻遺跡

平賀町教育委員会

平賀町埋蔵文化財調査報告書第28集　太師森遺跡発掘調査報告書、同第29集　大光寺新城

盛岡市教育委員会

盛岡遺跡群平成10年度発掘調査概報、盛岡市内遺跡群平成11年度発掘調査概要、史跡盛岡城跡石垣移動量調査報告書

大船渡市教育委員会

大洞貝塚範囲確認調査報告書

郡山市教育委員会

音路遺跡、清水内遺跡、小泉山田Ａ遺跡(第２次)・山田Ｂ遺跡、蒲倉古墳群、鴨打Ａ遺跡第２冊、宮ノ脇遺跡(第４次)、郡山東部23、郡山市埋蔵文化財分布調査報告７、第６回市内遺跡発掘調査成果展

会津坂下町教育委員会

会津坂下町文化財調査報告書第53集　舟渡(雲雀)城跡

茨城県教育委員会

九重東岡廃寺確認調査報告書１

前橋市教育委員会

内堀遺跡群ＸＩ、六供東京安寺遺跡、徳丸高堰Ⅱ遺跡・徳丸仲田Ⅲ遺跡・西善尺司Ⅲ遺跡・下増田常木Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅳ遺跡、鶴光路榎橋Ⅱ遺跡・徳丸高堰Ⅲ遺跡、平成11年度市内遺跡発掘調査報告書

高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第167集　高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書14、同第168集　乗附五百山遺跡市道Ｂ596号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、同第169集　京目久保・天神前・柳ノ内・上小路遺跡、同第170集　高崎市内小規模埋蔵文化財発掘調査概報４、高崎市遺跡調査会文化財調査報告書第76集　綿貫堀米前Ⅱ遺跡、同第77集　城下町Ⅱ遺跡、同第78集　東町Ⅵ遺跡、同第79集　旭町Ⅱ遺跡、同第80集　旭町Ⅱ遺跡、同第81集　中大類沖田遺跡

鴻巣市教育委員会

鴻巣市遺跡調査会報告書第10集　宮前本田遺跡

市原市教育委員会

平成12年度市原市内遺跡発掘調査報告

東金市教育委員会

佐古島遺跡・大関城跡

北区教育委員会

赤羽台遺跡

武蔵野市教育委員会

御殿山遺跡第２地区Ｌ地点、武蔵野市埋蔵文化財調査報告書５

八田村教育委員会

八田村文化財調査報告書第２集　野牛島・犬塚遺跡

飯田市教育委員会

北の原遺跡、三尋石遺跡、田圃遺跡Ⅱ、半の木遺跡、半の木遺跡、古市場遺跡・鳥屋場２号古墳、藪越遺跡Ⅱ、別府中島遺跡、黒田大明神原遺跡Ⅲ、恒川遺跡群他市内遺跡

伊那市教育委員会

伊那市内の民俗芸能(無形文化財)の記録第６集、城楽遺跡、伊那市の巨樹・老樹とその保護対策、増補改訂伊那市神社誌

福岡町教育委員会

富山県福岡町の文化財、福岡町埋蔵文化財調査報告書８　富山県福岡町沢川地区に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書

大門町教育委員会

大門町埋蔵文化財調査報告書第13集　二口油免遺跡発掘調査概報、同第14集　本田宮田遺跡発掘調査報告、同第15集　二口遺跡発掘調査報告(2)、同第16集　二口油免遺跡第Ⅱ次発掘調査概報(2)、同第18集　安吉遺跡発掘調査報告、同第19集　大門町布目沢地区埋蔵文化財発掘調査報告、同第20集　二口油免遺跡第Ⅲ次Ａ地区発掘調査概報、富山県大門町二口油免遺跡Ｂ地区発掘調査報告

野々市町教育委員会

長池キタノハシ遺跡、上林新庄遺跡・上林古墳・上林テラダ遺跡・下新庄タナカダ遺跡、栗田遺跡藤平地区・清金アガトウ遺跡、菅原キツネヤブ遺跡、冨樫館跡Ⅱ

福井市教育委員会

福井市三尾野古墳群発掘調査報告書、清水古墳群、鎗嶺山城跡、高柳遺跡

鯖江市教育委員会

鯖江市埋蔵文化財調査報告第３集　兜山北古墳・般若寺跡

多治見市教育委員会

多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第58号　大針台４・５号窯発掘調査報告書、同第62号　松坂３～７号窯発掘調査報告書

大垣市教育委員会

大垣市文化財調査報告書第34集　大垣市埋蔵文化財調査概要平成９年度、同第35集　昼飯大塚古墳Ⅴ、同第36集　大垣市埋蔵文化財調査概要、同第37集　昼飯大塚古墳Ⅵ、同第38集　大垣市埋蔵文化財調査概要、大垣市埋蔵文化財調査報告書第８集　大垣城跡Ⅰ、同第９集　曽根城跡、同第10集　荒尾南遺跡

池田町教育委員会

願成寺西墳之越古墳群

静岡市教育委員会

ふちゅ～るNo.８、静岡市埋蔵文化財調査報告44駿府城跡Ⅰ、同54　登呂遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ

韮山町教育委員会

史跡北条氏邸跡発掘調査概報、平成９年度文化財事業年報第５号、平成10年度文化財事業年報第６号

菊川町教育委員会

潮海寺門前町遺跡Ⅲ発掘調査報告書、菊川町埋蔵文化財報告書第60集　御領所遺跡

四日市市教育委員会

四日市市文化財保護年報10、一般国道１号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ、四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書24　山川遺跡・山川古墳群、同25　四日市代官所跡、同26　茂福城跡２、四日市市遺跡調査会調査報告書ＸＸⅠ市場城跡、同ＸＸⅢ　米田遺跡

安濃町教育委員会

安濃町埋蔵文化財調査報告14　大塚西山Ａ遺跡／倉谷方形台状墓発掘調査報告書

中主町教育委員会

中主町文化財調査報告書第56集　平成10年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅰ、同第57集　平成10年度中主町埋蔵文化財発掘調査集報Ⅱ、同第58集　平成10年度町内遺跡発掘調査年報

愛知川町教育委員会

愛知川町埋蔵文化財発掘調査報告書第７集　長野遺跡

愛東町教育委員会

愛東町文化財報告書第９集　愛東町内遺跡発掘調査報告書Ⅴ

大阪府教育委員会文化財調査事務所

年報３、土師の里遺跡他発掘調査概要・Ⅳ、みかん山古墳群、大阪府埋蔵文化財調査報告199-1栄町遺跡、同1999-2　恩智遺跡発掘調査報告、同1999-3　高柳遺跡、同1999-4　尾平遺跡、同1999-5　余部遺跡、同1999-7　岡遺跡、同1999-8　池上曽根遺跡Ⅱ、同1999-9　麻生中下代、同1999-10　秦廃寺、高向遺跡発掘調査概要、木の本遺跡、平石地区・桐山地区発掘調査概要、男里遺跡発掘調査概要、田能地区遺跡確認調査概要、陶器南遺跡発掘調査概要・Ⅶ、中神田遺跡発掘調査概要・Ⅱ、田井中遺跡発掘調査概要・Ⅸ、倉垣遺跡・長谷のガマ等発掘調査概要

大阪市教育委員会

大阪の歴史と文化財第７号

泉佐野市教育委員会

泉佐野市埋蔵文化財調査概要平成11年度、泉佐野市埋蔵文化財調査報告56　岡口・中嶋・白水池遺跡、同57　宮ノ前遺跡、同59　小塚遺跡、同60　市場西遺跡

貝塚市教育委員会

貝塚市埋蔵文化財調査報告第45集　三ヶ山西遺跡発掘調査概要、同第46集　貝塚市遺跡群発掘調査概要20、同第48集　脇浜川端遺跡発掘調査概要、同第49集　貝塚市遺跡群発掘調査概要21

泉南市教育委員会

泉南市文化財調査報告書第33集　泉南市遺跡群発掘調査報告書ＸⅦ

川西市教育委員会

平成11年度川西市発掘調査概要報告、史跡加茂遺跡

中町教育委員会

中町文化財報告26　牧野・町西遺跡・思い出遺跡群Ⅲ

大和郡山市教育委員会

大和郡山市文化財調査概要39　若槻環濠第１次発掘調査報告書、同40　西田中遺跡、順慶と筒井城を語る

榛原町教育委員会

榛原町文化財調査概要21　榛原町内遺跡発掘調査概要報告書1998年度

和歌山市教育委員会

和歌山市内遺跡発掘調査概報平成10年度、史跡和歌山城第19次発掘調査概報、高井遺跡第２次発掘調査概報

淀江町教育委員会

淀江町埋蔵文化財調査報告書第36集　百塚遺跡群Ⅳ、同第48集　淀江町内遺跡Ⅶ、同第50集　妻木晩田遺跡、上淀廃寺彩色壁画の謎を追う

大山町教育委員会

大山町埋蔵文化財報告書第17集　妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ

北条町教育委員会

北条町埋蔵文化財報告書30　町内遺跡発掘調査報告書第10集

出雲市教育委員会

浅柄遺跡

松江市教育委員会

田和山遺跡

広島県教育委員会

中世遺跡調査研究報告第２集　吉川元春館跡の研究、史跡吉川氏城館跡　小倉山城跡

庄原市教育委員会

庄原市文化財調査報告第11集　和田原Ｃ地点遺跡発掘調査報告書、同第12集　下重行第１号古墳

山口市教育委員会

山口市埋蔵文化財調査報告書第47集　八ヶ坪遺跡、同第56集　小原遺跡Ⅰ、同第57集　神郷大塚遺跡Ⅱ、同第58集　大内氏館跡Ｘ、同第66集　常栄寺、同第73集　東禅寺・黒山遺跡、同第74集　下糸根遺跡、同第75集　小原遺跡Ⅱ

豊浦町教育委員会

豊浦町の文化財第14集　湯町遺跡群Ⅰ、同第15集　高野遺跡、同第16集　吉永遺跡

香川県教育委員会

旧練兵場遺跡Ⅲ、木太本村Ⅱ遺跡、香川県中世城館跡詳細分布調査概報平成11年度、埋蔵文化財試掘調査報告ＸⅡ、香川県埋蔵文化財年報平成11年度

今治市教育委員会

今治市埋蔵文化財調査報告書第53集　近見ハサマ古墳、同第54集　山方桜ノ町遺跡、同第55集　市内遺跡試掘確認調査報告書Ｘ、同第56集　市内遺跡試掘確認調査報告書ＸⅠ、同第57集　桜井浜ノ上遺跡

南国市教育委員会

南国市埋蔵文化財調査報告書第18集　岩村遺跡群Ⅲ、同第19集　岩村遺跡Ⅳ

土佐山田町教育委員会

土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第28集　加茂ハイタノクボ遺跡

宗像市教育委員会

宗像市文化財報告第48集　久原瀧ヶ下

直方市教育委員会

直方市内遺跡群Ⅰ　直方市文化財調査報告書第21集、西光寺遺跡群Ⅰ　同第22集、水町遺跡群整備事業報告書　同第23集、片山遺跡　同第24集

玄海町教育委員会

玄海町文化財調査報告書第８集　山村家文書目録

勝本町教育委員会

勝本町文化財調査報告書第９集　國柳遺跡、双六古墳発掘調査概報

熊本市教育委員会

大江遺跡群Ⅲ、つつじヶ丘横穴群発掘調査概報Ⅳ、神水遺跡Ⅲ、熊本市埋蔵文化財調査年報第３号

人吉市教育委員会

ひとよし歴史研究第４号

耶馬渓町教育委員会

耶馬渓町文化財調査報告書第２集　岸の上遺跡

串間市教育委員会

串間市文化財調査報告書第22集　市内遺跡発掘調査報告書

佐土原町教育委員会

宮崎県佐土原町文化財調査報告書第15集　佐土原町内遺跡Ⅲ

三股町教育委員会

三股町文化財調査報告書第３集　三股町内遺跡Ⅰ

北上市立博物館

北上市内の指定木・保存木、研究報告書第13号

(社)日本金属学会附属金属博物館

紀要第33号、同第34号

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

弥生から古墳へ、年報第６号、権現前遺跡

土浦市立博物館

紀要第11号

栃木県立なす風土記の丘資料館

年報第８号

かみつけの里博物館

はにわ群像を読み解く

国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館自己点検・評価報告書、縄文文化の扉を開く

流山市立博物館

年報No.22

出光美術館

研究紀要第６号、館報第113号

(財)新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館

南山伏町遺跡Ⅲ、尾張徳川家下屋敷遺跡

(財)府中文化振興財団府中市郷土の森博物館

年報　第14号

長野県立歴史館

研究紀要第７号、年報第２号

氷見市立博物館

氷見の漁業と漁村のくらしⅡ

石川県立歴史博物館

能楽－加賀宝生の世界－

土岐市美濃陶磁歴史館

三条界隈のやきもの屋

常滑市民俗資料館
常滑市文化財調査報告書第24集　茨廻間古窯跡群発掘調査報告書、同第25集　大曽公園古窯跡群発掘調査報告書

浜松市博物館
館報第13号、須恵器と陶器

豊田市郷土資料館
豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集　岩長遺跡

安城市歴史博物館
安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第７集　安祥城址・寒池遺跡・郷裏遺跡、同第８集　釈迦山遺跡

斎宮歴史博物館
絵巻を創る

鈴鹿市考古博物館
岸岡山Ⅲ遺跡、伊勢国府跡、伊勢国府跡２、年報第１号、誕生、石と人のくらし、摺絵

大津市歴史博物館
年報平成10・11年度、古絵図が語る大津の歴史

岸和田市立郷土資料館
短冊優品展Ⅰ

吹田市立博物館
東寺領垂水庄

大東市立歴史民俗資料館
大東市埋蔵文化財調査報告第16集　寺川遺跡発掘調査報告書、同第17集　西諸福遺跡発掘調査報告書

兵庫県立歴史博物館
塵界第11号、同第12号

神戸市立博物館
『親しむ博物館作り事業』報告書

春日町歴史民俗資料館
七日市遺跡と「氷上回廊」、館蔵名品展－書と絵画－

広島県立歴史民俗資料館
年報第20号、研究紀要第２集、川に生きる

福岡市博物館
年報８、研究紀要第10号、平成９年度収集収蔵品目録15、福岡市博物館名品図録

佐賀県立九州陶磁文化館
年報・資料目録　平成11年度

ミュージアム知覧
紀要第６号、館報第７号

東北学院大学学術研究会
東北学院大学論集－歴史学・地理学－第34号

東京都立大学人文学部考古学研究室
人類誌集報2000

お茶の水女子大学博物館学研究室
大塚町遺跡

立教大学学校・社会教育講座学芸員課程
Moseion46

東海大学校地内遺跡調査団
東海大学校地内遺跡調査団報告９・10

東海大学史学会
東海史学　第35号

金沢大学文学部考古学研究室
紀要第25号

愛知大学文学部史学科
愛大史学第10号

愛知学院大学文学会
文学部紀要第30号

名古屋大学年代測定総合研究センター
名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(ＸⅡ)

滋賀県立大学人間文化学部
人間文化９号

大阪大学大学院文学研究科
待兼山論叢第34号

大谷女子大学博物館
大谷女子大学博物館報告書第45冊　河内・大日寺

帝塚山大学
帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要第２号

関西学院大学文学部史学科
関西学院史学第28号

大手前大学
手前大学人文科学部論集第１号、大手前大学社会文化学部論集第１号

奈良大学図書館
紀要第29号

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書(1996年(平成８年)４月～2000年(平成12年)12月)

九州大学文学部考古学研究室
福岡県岐志元村遺跡、佐賀県大友遺跡

熊本大学文学部
考古学研究室報告第36集

慶尚大學校博物館
慶尚大學校博物館研究叢書第23輯　陜川玉田古墳群Ⅸ

東義大學校博物館
東義大學校博物館学術叢書７　金海良洞里古墳文化

宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市関連遺跡発掘調査報告書第18冊　東山

遺跡Ⅶ、同第26冊　桃生城跡Ⅸ、年報2000

(株)ジャパン通信情報センター

文化財発掘出土情報　第225～228号

(株)東京美術

ものづくりの考古学

(有)朋文出版

日本史学文献目録1998(平成10)年版

(財)韓国文化研究振興財団

青丘学術論集第18集

八王子市館町遺跡調査団

館町遺跡Ⅳ

愛甲原小稲葉遺跡発掘調査団

愛甲堂山遺跡発掘調査報告書

十条久保遺跡調査会

十条久保遺跡Ⅱ

四ッ谷前地区遺跡調査団

日野市四ッ谷前遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

足立区遺跡調査会

舎人遺跡Ⅱ

南書会

編年－その方法と実際－

浜松市埋蔵文化財調査事務所

東畑屋遺跡

(財)古代學協會

古代文化　第53巻第1～3号

尼崎市立文化財収蔵庫

尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成7年度(1)、尼崎市文化財調査報告第29集　平成9年度国庫補助事業尼崎市内遺跡復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書

妙見山麓遺跡調査会

大和川流域の遺跡群Ⅰ、Ⅱ

六甲山麓遺跡調査会

西岡本遺跡

宮内庁正倉院事務所

正倉院紀要第23号

奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所史料第53冊　平城京木簡2、奈良国立文化財研究所学報第61冊　長屋王家・二条大路木簡を読む、同第62冊　史跡頭塔発掘調査報告、郡衙正倉の成立と変遷、竪穴住居の空間分節に関する復原研究

奈良県立橿原考古学研究所

奈良県遺跡調査概報1997年度、奈良県文化財調査報告書第80集　橘寺、奈良県立橿原考古学研究所調査報告書第76冊　南郷遺跡群Ⅳ、同第77冊　南郷遺跡群Ⅴ、考古學論攷第3～9冊、同14冊、同第19～21冊、同第23冊、年報25平成10年度、大和木器資料Ⅰ、年報1974～1982、国道165号線高田バイパス予定路線付近遺跡分布調査概報、藤原宮跡昭和41年度調査概要、同昭和42年度調査概要、同昭和43年度調査概要、同昭和49年度調査概要、奈良県の主要古墳、珠城山古墳、平城京左京三条二坊十三坪、平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告、平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告、平城京右京3条1坊6ノ坪発掘調査報告、昭和57年度明日香村流域関連公共下水道事業発掘調査概報、昭和53年度唐古・鍵遺跡第4・5次発掘調査概報、昭和56年度唐古・鍵遺跡第12次発掘調査概報、鴨都波遺跡、御所市埋蔵文化財調査報告第1集　樋野古墳群、巨摩山古墳群分布図、宝院遺跡発掘調査報告書、舞田谷第5号墳前庭部発掘調査報告、藤原宮跡－木簡－、飛鳥京跡関連史料集(1)近世地誌篇、同(2)近世紀行文篇、同(3)近世地誌篇、同(4)近世地誌篇、西隆寺金堂跡発掘調査概報、西隆寺発掘調査報告、昭和36年度飛鳥遺跡調査概報、都祁村吐山池ノ谷1号墳・奈良市登大路町の瓦窯発掘調査概報、唐古弥生遺跡調査概要、天理市平等坊・岩室遺跡発掘調査概要、真美ヶ丘団地予定地内所在遺跡昭和46年度発掘調査概要、奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第5～8輯、奈良県文化財調査報告書第3集、同第4集、同第5集、同第6集、同第7集、同第8集、同第9集、同第10集　藤原京跡出土木簡概報、同第12集　菅原寺、同第15集　秋篠寺境内発掘調査報告、同第20集　天理市石上・豊田古墳群1、同第23集　佐味田坊塚古墳、同第25集　清水谷古墳群、同第26集　佐味田ナガレ山古墳、同第27集　天理市石上・豊田古墳群Ⅱ、同第28集　奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ、同第29集　佐味田狐塚古墳、同第31集　新庄火野谷山古墳群、同第36集　麻ノ谷1号墳、同第42集　二上山北麓石器製作遺跡の調査、奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告第8回、飛鳥京跡調査私見、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第18冊　室大墓、同第30冊　宇陀・丹切古墳群、同第34冊　桜井市外鎌山北麓古墳群、同第36冊　大福遺跡、同第37冊　氏家古墳群、同第38冊　二上山・桜ヶ丘以西、同第41冊　登志院遺跡、同第44冊　見田・大沢古墳群、同第47冊　平隆寺、同第72冊　山口遺跡群、青陵1号～50号(復刻版)、同51号～100号(復刻版)、飛鳥寺南方遺跡発掘調査報告書、飛鳥藤ノ木古墳、飛鳥藤ノ木古墳第2・3次発掘調査概報、大和国条里復原図

朝鮮学会

朝鮮学報　第178輯

(財)由良大和古代文化研究協会
研究紀要第6集
津山弥生の里文化財センター
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集　的場古墳群、津山弥生の里第8号
國立文化財研究所
文化財　第三十三号

弥栄町教育委員会
京都府弥栄町文化財調査報告第19集　弥栄町文化財調査報告
宮津市教育委員会
宮津市史　史料編第四巻
大山崎町教育委員会
大山崎町埋蔵文化財調査報告書第22集
八幡市教育委員会
八幡市埋蔵文化財発掘調査概報第28集　女郎花遺跡第3・5次発掘調査概報、同第29集　清水井遺跡発掘調査概報
京都国立博物館
平成11年度年報
京都府京都文化博物館
京の匠展、朱雀第12集、京都文化博物館研究研究報告第14集　平安京右京二条二坊十六町、10年のあゆみ
園部文化博物館
発掘された埋蔵銭
宇治市歴史資料館
第16回宇治市発掘調査報告会
城陽市歴史民俗資料館
金銀糸
京都橘女子大学
研究紀要第27号
佛教大学
園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書
亀岡市役所
新修亀岡市史　資料編第三巻
城陽市役所
城陽市史第4巻
丹波史談会
丹波第2号
大野左千夫
大谷古墳とその遺物
上谷正男
間人と宇川路の古地名をアイヌ語で歩く
河野一隆
東海の後期古墳を考える、縄文時代の集落と環状列石、弥生時代の交易、慶星大学校博物館研究叢書第4輯　金海大成洞古墳群Ⅰ(日本語版)、名和町埋蔵文化財調査報告書第24集
茶畑山道遺跡、茶畑山道遺跡遺物観察表、同第27集　長者原遺跡
平良泰久
亀田　博　著作目録
中尾芳治
まちに住まう－大阪都市住宅史
中川和哉
旧石器考古学辞典
樋口隆康
考古　2001年第1期
福永伸哉
弥生・古墳時代青銅器の使用痕研究

編集後記

情報80号が完成しましたのでお届けします。

本号では、昨年度後半に調査した遺跡の成果を中心にまとめました。女谷横穴群Ｂ支群は小さな谷を挟んで向かい合う横穴群で、支群内における横穴の群構成が良く分かる興味深い事例です。女谷横穴群、および、これに隣接する荒坂横穴群では今年度も調査が続いており、しばらく目が離せません。

（編集担当＝森島康雄）

京都府埋蔵文化財情報 第80号

平成13年６月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877（代）　Fax (075)922-1189

印刷　三星商事印刷株式会社

〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961（代）